

あたし

**妹のほうがお姉ちゃんより
可愛いですよ、先輩？**

鏡遊



ファンタジア文庫

2987

目次ですよ！

妹^{あたし}

のほろがお姉ちゃんより
可愛いですよ、先輩？

先輩？

プロローグ	004	7 先輩ったらあたしの愛が わからないんですねえ	155
1 まさか告るとは思ってませんでした	006	8 どうして、先輩が好きなのは お姉ちゃんなんですか？	178
2 もうあたしを好きで いいんじゃないですか？	035	9 人を褒めて、呪っているだけの人生なんて つまらないですよ	223
3 亜月ちゃんルートは本気で♥	063	10 残念、亜月ちゃんでした	244
4 あたしの声にちょっとは気づけよ	084	11 あたしが関係ないところで、終わりにしないで	258
5 女の子って、ちょこっと馬鹿なくらいが 可愛いですよ♥	104	12 だって、先輩が好きになったのは	276
6 ほっちで寂しい後輩から、 お願いがあるんですけど♥	134	エピソード	291
		あとがき	300

プロローグ

「ねーねー、先輩。遊びに行きましようよ！」

「見てのとおり、勉強中だ。俺に遊んでる余裕などない」

放課後の教室、クラスメイトたちはとくにみんないなくなっている。

俺は自主的に居残りして、参考書を睨みながら勉強中。

「見てのとおり、あたしは先輩を墮落の道にお誘い中です！ 余裕がなくてもいいから遊びましようよ！ 人生、棒に振しましようよ！」

「すげえ誘い文句だな！ 亜月は一人でどこにでも行けばいいだろ！」

俺の前の席に、後ろ向きで座っているのは後輩の天詞亜月。

クセのある茶髪、余裕で校則違反のパーカーにミニスカートの派手すぎる女子だ。

「えーっ、こんなに可愛くておっぱい大きい後輩が誘ってるのに？ ほら見て見て、軽い上下運動でこんなにも乳揺れますよ？」

「そんなもん見せられても、絶対に揉まねえからな！」

「揉ませるとは言ってませんよ!？」

おっと、失敗。確かに亜月の胸は高校一年生とは思えないほど立派だ。

だが、俺の向学心はおっぱい程度では揺るがない。

「いいから、とつと帰れ。いくら邪魔しても無駄だからな、無駄」

「そんな、あたしは先輩のためにこの身を捧げてきたのに……そんな健気で忠実な後輩を邪魔って……」

「うっ……じゃ、邪魔って言ったのは悪かった。そうだな、遊びには行けないが、少し話し相手になるくらいなら……」

「ハーイ、キタキタキター！ なんだかんだで先輩ったら亜月ちゃんのこと大好きなんだからw ですよ、ね、勉強よりおっぱいでしょね！」

「あ、てめえ、また無駄に演技力発揮しやがって！ つーか、抱きついてくんない！」

「嬉しくせにー！ まったく先輩ってばザコメンタルなのに、ぶっきらぼうなフリしちゃって面倒くさいですよねー！」

「面倒くせえのはおまえだ！」

ああ、どうして俺はこんなウザ面倒くさい後輩に目付けられてしまったのか。

しかも、こいつとは切るに切れない縁ってやつまであるのが困ったものだ――

1 まさか告るとは思ってたませんでした

高校二年生の夏は、たった一度しかない。
俺はそんなことにも気づいていなかった。

中古の型落ちスマホを取り出して、写真を表示させる。

写っているのは、先日、俺が通う貴秀院高校の廊下に貼り出された、一学期中間テストの結果だ。

貴秀院では年五回の定期テストのたびに、上位五十名までの氏名と順位、合計点数が公開される。

進学校である貴秀院では、そこに名前を記されることが大きな意味を持つ。

二年生の上位五十名のトップ、一位の名前は——風堂理玖。つまり、俺。

貴秀院でトップクラスに入るということは、全国レベルでも上位ということだ。
決してお山の大将ではない。

結果発表の翌日、俺が他の生徒がいない早朝に登校して、廊下に貼り出された用紙をスマホで撮影したことを、誰が責められるだろう。

貴秀院に入学して一年、初めての首位だった。

記念に写真くらい撮ったっていいだろ。文句あんのか。

そして、自分の名前のアップともう一枚——二位の名前とともに撮影した。

二位の生徒の名前は、天詞彩陽。

彩陽は一年生時は、すべての定期テストで常にトップだった秀才だ。

そんな彼女の首位転落は、校内ではけっこうな大事件だった。

二年生はもちろん、関係ないはずの三年生や一年生まで騒いでいたほどだ。

「おはようございます、風堂くん。気持ちのいい朝ですね」

ふと思いつく——ある日の昇降口、下駄箱の前。

下駄箱を開けて、靴から上履きに履き替えていた天詞彩陽を見たことがあった。

長くて艶やかな黒髪、奇跡のように整った美貌、すらりと細い身体。

上履きに履き替えるために屈んだときに、膝丈のスカートからわずかに覗いた真っ白な太もも。

俺に気づくと、軽やかに振り返って、朝の挨拶をしてきた。

ブラウスとスクールベストに包まれた胸元が豊かに盛り上がっている。思わずそんなところに目がいったことを恥じながら、「ああ」とぶつきらばうに挨拶を返すのがやっとだった。

俺の目線には気づいた様子もなく、愛想のない挨拶も気にせず、彩陽はにっこりと笑ってくれた。

天使——などというひねりのないあだ名がつけられるのも納得というものだ。

彩陽は成績優秀、品行方正、性格も文句のつけようがない。

スポーツも万能で、中学時代は軟式テニスで全国大会にも出場しているらしい。鍛えている上に行儀がいいので、なんでもない動きにすら見とれてしまう。

ただ歩いているだけで、絵になる女の子なのだ。

なにをやらせても完璧な彩陽に、俺はテストの総合得点で勝利した。

はつきり言おう——俺は、天詞彩陽のことが好きだ。

彩陽のことが好きで好きで、本当に好きで。

万能な彼女に並び立てるものを一つでも持てるように、死に物狂いで努力して。

ようやく、成し遂げたのだ。テストで彩陽を越えるという快挙を達成した。

だから——告白したっていいじゃないか！

たった一度の高二の夏を好きな女子と過ごしたいじゃないか！

六月上旬、衣替えが済んで数日経ったある日。

俺は、クラスメイトでもある彩陽の机にラブレターを忍ばせた。

告白の手段については、一週間ろくに眠らずに考え抜いたが——

彩陽の連絡先も知らないし、どこかで会う約束を取りつけられる関係でもない。

そうなる——ラブレターしかないだろう？ 反論は受け付けない。

同じクラスなのだから、彩陽の机の位置は知っている。

十六時間かけて書き上げた、たった便せん一枚分のラブレターを、俺は何食わぬ顔で彩陽の机に滑り込ませることに成功した。

クラス全員が教室移動で出て行ったのを見計らい、彩陽の机の横を通り過ぎつつノールックで滑り込ませるといふ無駄に高度な技術を使った早業だった。

もちろん、自宅で綿密な練習を積んだ上で決行した。

そこまでできれば、あとはもう彩陽がラブレターを発見するのを待つのみだ。

どんなに遅くとも、彩陽はその日のうちにラブレターに気づくだろう。

優等生である彼女は自宅で予習や復習を怠らないだろうし、その際にラブレターを発見するはずだ。

というわけで――

「すみません、風堂くん。今日の放課後、十七時に教室でお話しできますか？」

彩陽が話しかけてきたのは、俺がラブレターを仕込んだ翌日だった。

体育の着替えのために教室を出たところで、たたたと小走りに駆けてくる音が聞こえたかと思うと、彩陽が小声でささやき、そのまま通り過ぎていったのだ。

来た！ マジで来た！

彩陽と話せるだけで、ラブレター仕込んだ甲斐があった！

LINEの既読スルーでも傷つくだろうに、ラブレターなんて大げさなものを出して置いて無かったことにされたら、再起不能やむなしかった。

そんな不安は彩陽のささやきで吹き飛び、その場で小躍りしないためにはかなりの精神力を要した。

「ん？」

「ささっ」

今、廊下の曲がり角で、邪悪な笑みが見えたような気がした。

一瞬で角の向こうに消えてしまったので、よく確認できなかった。

「なんだったんだ……？ まあ、いいか」

なにやら嫌な予感があるが……追いかけるほどのことではないだろう。

このなんでもない判断が、俺の運命を螺旋階段のようにねじ曲げてしまうのだが――それはのちのお話。

待ちに待った放課後になり、一度教室を出た。

図書室で勉強して時間を潰し、頃合いを見計らって教室に戻る。

教室の扉を開くと――当然、彩陽の姿があった。彼女が約束を違えるはずもない。

艶のある長い黒髪に、白い半袖ブラウスにスクールベスト、胸元のリボンも緩めることなく結んである。スカート丈は慎ましい膝丈。

可憐にして清楚、どこに出しても恥ずかしくない美少女っぷりだ。

俺は決して女性を見た目で判断しないが、それでも彩陽の容貌にはついドキドキしてしまう。

「あ、風堂くん。ごめんなさい、わざわざ呼び出したりして……」

「い、いや、大丈夫だ。問題ない」

なんで偉えらそうなんだ。俺は何様だ。

しかし、彩陽のほうは気にした風でもない。

「そ、それで……こちらのことなんですけど」

「……………」

わかつてはいても、思わず身構えてしまう。

彩陽がスカートのポケットから取り出したのは、俺が机に忍ばせたラブレターだ。

「すみません、昨日は気づかずに……家でカバンから教科書を取り出したときに、やっと気づきました」

「そ、そうだよな。気づきにくいよな。こっちこそ悪かった」

ラブレターは、無事に彩陽の教科書やノートにまぎれて彼女の自宅へ運ばれたようだ。なにかのはずみで、机から落ちたりしていたら目もあてられなかった。

多少、運任せが過ぎたことは反省するべきだろう。

「こちらのお手紙、拝読いたしました。身内以外から手書きのお手紙を受け取ったのは初めてかもしれません。さすがは風堂くんです、お見事な文章でした」

「いや、それほどでも……」

俺も手紙なんて書いたのは生まれて初めてだった。

時候の挨拶から、宛名あなの書き方まで細かく調べたので、えらく手間がかかってしまった。文字も上手くはないが、一字一字できる限り丁寧に書いた。

いい加減な文字では誠意が感じられないだろう。手間は惜おしんでない。

「あの、それで……このお手紙の内容なんですけど……」

「あ、ああ。驚おどろかせたよな。本当に悪かった。でも、それが俺の本当の気持ちで……」

「……はい、風堂くんはこういうお手紙で人をからかうような方ではありませんよね」

彩陽は、便せんで口元を隠かくすようにしている。可愛い。

「このお手紙、その……とても嬉しいですよ。風堂くんがわたしに……好意をお持ちなのは本当に嬉しいですよ」

「……………」

そんなに正直に言われると、さすがに照れる。

彩陽はもちろん、俺まで耳が赤くなるのを抑おさえられない。

「ただ……」

「ん？」

彩陽が便せんを持ち直して、そこにじっと視線を落としている。

「ただ……どうしても、この最後の『追伸』の意味がわかりにくいのですが……」
「追伸？」

俺、そんなの書いたか？

手紙の内容は一字一句に至るまで暗記している。

「夜に書いたラブレターは必ず朝に見直せ」という先人の教えに従って、朝になってから何度となく見直して、過剰にポエティックな表現などは削除した。

あらためて思い返しても——追伸など書いた記憶がない。

「ちよ、ちよと待ってくれ、天詞。追伸って……？」

「わたし、その、てっきりラブレターかと思ったのですが……この追伸——あなたの妹の亜月さんはもつと好きです」というのはなんでしょうか……？」

「はあ!？」

「きゃっ!」

思わず飛び出た大声に、彩陽がびくりとする。

「ちよ、ちよと見せてくれ!」

彩陽に歩み寄ると、彼女の手から便せんを取り上げた。

さつと目を走らせる。

何度となく見直して、わずかなインクのかすれまで記憶している手紙だった。

しかし——彩陽の言うとおり、最後に『追伸』が付け加えられている。

筆跡は俺のもの——に見えて微妙に違う。

だが、本人でなければ気づかない程度の違いだった。

「ま、待ってくれ、天詞。これはその——」

「あ、そうですか。そうなんですネ、やっとわかりました!」

「え?」

「斬新ですね! 亜月ちゃんに告白するためにあえて姉のわたしにラブレターに偽装したお手紙を渡すなんて!」

「は……?」

この美少女は目をキラキラさせて、なにを言ってるんだ?

「さすが、風堂くんです。ですが、わざわざわたしのことまでその……す、好きだなんて持ち上げなくても、普通にお願ひされれば風堂くんのお気持ちを妹に伝えるくらいはしますよ?」

「……………」

なんか、とんでもねえ誤解の上に誤解を重ねてないか、このクラスメイト。

というか、さつきから――

「あ、あのな、天詞。その、手が……」

「手？ 手ってなんの……ああつ、ご、ご、ごめんなさいっ！」

彩陽が興奮のあまり、俺の手を両手で包み込むようにして握っていたのだ。まるで天使の羽に包まれたかのようなだった――いやあ、我ながらキモい。

「つ、つい興奮してしまつて……」

彩陽は俺の手を離すと、真っ赤になつてしどろもどろになった。

むしろ、もっと興奮してもらいたいくらいだが。

どうも、彩陽には天然の疑いがある。演技ではなく、ガチの天然だ。

しかし、こんなときにその天然が炸裂するとは……。

普通、そんな誤解しねえだろ。告白で斬新さを狙つてどうする。

俺は告白が失敗に終わる可能性も考え、何通りものシミュレーションも行っていた。

身に覚えのない追伸と、天然で台無しになる可能性など予想外にもほどがある。

人生は、シミュレーションではたどり着けない未来に満ちているらしい。

こんな馬鹿なことがあるかあああ！

一階へ向かつて階段を下りながら、俺は混乱していた。

はつきり言つて、女子に告るのは人生で初めてだ。

だからこそ、ラブレターなどという時代錯誤な手段を選んできたわけだが。

例の追伸を書いた覚えはまったくない。

それも、よりによつて――告つておいて、「君より君の妹のほうが好きです」なんて書くだろうか？

天詞彩陽の妹というのは――つまり、あいつだ。

「せーんはいっ♡」

「うおっ!？」

どんつ、と鈍い音が響いて背中になにかがぶつかつてきた。

ちよど階段を下りきつたところだったが、よろめいてしまふ。

「お、おいっ！ なんだ――つて、おまえか！」

「ハァイ、おまえです！ 理玖先輩の亜月ちゃんですよ！」

振り向くと、頬が触れ合うほどの距離に後輩の顔があった。

ぱつちりとした大きな瞳。ニヤニヤと笑っている口元、卵形の整った輪郭。

明るい茶色のセミロングの髪はふわふわと柔らかそうだ。横でちょこんと結んで、ワンポイントの可愛さを出すのも忘れていない。

「俺のじゃない！　というか、離れる！」

「ええー、こんなに可愛い後輩がなついているのに、ご無体な」

ぎゅううつと抱きついてきて、その豊かな胸が俺の腕に当たって潰れている。

「抱きついたままでも話はできるし。先輩、浮かない顔ですね」

「俺はいつもこんな顔だ」

「そっかなー。いつもはもうちよつと面白い顔ですよ」

「うつ」

なにを思ったのか、亜月はすりすり頬ずりをしてくる。

少女の頬の柔らかさが、これでもかと伝わってきてしまう。

「なにをしてるんだ、なにを！　おまえは猫なのか!？」

「先輩の可愛いにゃんこ後輩ですよ、にゃんにゃん。今さらこのくらいで照れる関係じゃないっしょw」

「どんな関係だよ、俺とおまえは！」

俺は、ぐいっと亜月の肩を押して無理矢理引き剥がす。

「もー、先輩ってば照れ屋さん♡ もっとあたしとイチャコラしたいくせに」

「おまえは、もうちよつと恥じらいを持て。ついでに言つとくが、おまえの格好、ツッコミどころがありすぎだぞ！」

「えー、フツのJKファッションじゃないですか。なんのご不満が？」

「おまえには衣替えの概念がないのか。もう夏だぞ」

六月になれば十分に気温は高い。

当然ながら、我が貴秀院でも衣替えは済んでいる。

男子は半袖の白ワイシャツにネクタイ、紺のズボン。

女子は白のブラウスにスクールベスト、薄いグレーのスカート。

俺は学校指定の服装だが、目の前にいる後輩と来たら――

「このパーカー、先月まで着てたのよりペラッペラですよ。中のブラウスは半袖ですし。

つか先輩、パーカー女子、好きじゃないんですか？」

亜月は、パーカーの襟元をぐいっと引っ張って中を見せてくる。

こらこら、女子が簡単に服の中身を見せないように。

「そんなフェチはねえよ。パーカーは思いっきり校則違反なんだが……そのスカートはもつと問題だ！　短すぎる！」

びしつと亜月を指差す。

スカート丈は、太ももの付け根くらいまでしかないのでは。

「えー、長いのはやっぱ野暮ったいっつか、可愛くないっすよ。先輩だって、短いほうが好きなくせにいい♡」

亜月は、ぴらりとスカートをめくる。ただでさえギリギリの丈だったのに、太ももがきわどいところまで見えてしまっている。

「おつ、おまえ……！ だから、いちいち中身を見せようとするな！」

慌てて周りをきよろしてしまふ。幸い、他の生徒は見当たらぬ。

「あつ、他の野郎には見せたくないって？ きゃー、あたしを独り占めしたいんですね！」

「俺も、おまえのスカートの中身を見せられるような関係じゃねえんだけど……」

そろそろ疲れてきたぞ。

ただでさえ、人生のビッグイベントが終わったばかりなのだから。

「ところで理玖先輩、お姉ちゃんに告っちゃいました？」

「……………っ!？」

亜月のいきなりの発言に、俺はフリーズする。

一方、先輩はニヤニヤと悪魔のような笑みを浮かべている。

「あ、亜月……おまえ、なんでそれを？」

「先輩がウチの姉を狙ってるのは感じてましたからね」

「ぐっ……………！」

「わかりやすかったですからね、先輩は。あたしがお姉ちゃんの話話を振ったら明らかに挙動不審になるし、さりげないフリでグイグイ姉の情報を聞き出してくるし。あれで気づかないほうが難しいですよ」

「……………」

しまった、俺としたことが……！

亜月と出会ってすぐに彩陽の妹だと知ったが、この先輩を利用して意中の相手に近づくつもりはなかった。そんなセコいマネはなあ……。

ただ、彩陽のことを知るチャンスがあれば、つい聞いてしまうことは何度もあった。

学年一の優等生の情報を知りたがるだけのクールな男を装ったのに、バレバレだった

とは……！

「でもでも、まさか告るとは思ってませんでした。ヘタレでチキンな恋愛下級戦士と侮ってごめんなさい」

「もつと謝ってほしいくらいだな！」

後輩が、ここまで容赦ないことを思っていたとは。少し傷つく。

「い、いや……それはいい。よくはないが、なんで告ってきたことを知ってたんだ？」

「そりゃ知ってますよん」

亜月はまたニヤッと笑うと、スマホの画面を向けてきた。

そこには——俺が何食わぬ顔で彩陽の机にラブレターを滑り込ませる瞬間が、くつきりと写っていた。

「いや、おサイフ忘れたからお姉ちゃんにお昼代をたかりに教室に行ってみれば、理玖先輩がウチの姉の机を漁ってたんですもん」

「あ、漁ってたんじゃねえよ！ そうじゃなくて——」

なんとというバッド・タイミング。

よりによって、ラブレターを出した相手の妹に目撃されていたとは。

「わかってます、わかってます。先輩が教室を出たあとで、妹としては放置しておけなかったので姉の机を調べておきましたから。せつない恋心を綴ったラブレターが出てくるとは思いませんでしたけど」

「お、おまえ……人の手紙を勝手に開けるのは人としてどうなんだ!？」

「姉の机になにか仕込まれてるのを見たら、普通調べますよね？」

「……調べるだろうな」

「つか、人の机に勝手にモノ突っ込むのも大概ですよ？」

「そうですね」

遂に敬語。

そこは俺も認めるしかない。

さすがに危険物を仕込むとまでは思わないだろうが、心ないイタズラの可能性もある。

「で、先輩たちの教室を探ってたんですが、お姉ちゃんが動いたんで、今日だなと」

「廊下で妙な動きをしたのは亜月か……って、待てコラ！ じゃあ、おまえしかいねえじゃねえか！」

「いやん、あたしだけなんて情熱的な告白ですね。姉に続いて妹にも告るとか、姉妹井つてやつですか？」

「ホント、ふざけるなよおまえ！ そうじゃなくて、追伸——」

「ふざけてませんもんw」

亜月はふざけて言うのと、スキップのような軽い足取りで廊下を歩き始める。

ひらひらする危なっかしいスカートに思わず目を向けつつ、俺はそのあとを追う。

ここで逃がしてなるものか。

亜月は俺の追及^{つぎめ}をふわふわかわしつつ、上履^{うわば}きのまま校舎の裏庭へと出た。裏庭といっても、移動式のバスケットゴールと、ベンチが一つ置かれてるだけだ。バスケットゴールは古い。グラウンドあたりに置かれていたものを移動してきて放置してあるのだろう。

亜月はベンチに遠慮^{えんりょ}なく座り込んで、パーカーのポケットからなにやら取り出した。

「おい、亜月……」

「いいから、先輩。これでも食べて落ち着いて」

亜月は、チョコレート菓子^{がし}——パッキーの箱から一本取り出して、ぱくりとくわえると俺にも差し出してきた。

「知ってんだろ、俺は甘いもの苦手なんだよ」

「好きな女子の妹も甘くて美味^{おい}しいですよ？」

「なんの話だよ！ そうじゃなくて、犯人はおまえしかいないって言ってるんだよ！」

「ハイ？ 犯人……とは？」

亜月はわざとらしく目をパチパチさせて、可愛^{かわい}らしく首を傾^{かじ}げた。ウゼえ。

「俺が手紙^しを忍^{しの}ばせたのを見てたなら、勝手に追伸を加筆した犯人は他にいないだろう」

「ハッハッハ、見事な推理だ。君は探偵^{たんてい}にでもなったほうがよろしい」

「二時間ドラマの犯人か？」

しかも、かなり古いタイプの犯人だ。今時、どこでそんなものを観たのやら。

「ちえっ、バレたか。できれば、波が打ち寄せる断崖^{だんがい}で追^おい詰められたかったですわね」

「そんな演出いらねえ」

二時間どころか、二十分もかからずに犯人を突き止めたのはラッキーだが。

いやまあ、あの追伸の内容で犯人はほぼ確定してたけどな。

「実は亜月ちゃんって無駄^{むだ}に器用なんですよ。昔から人のまねっこも大得意！ 先輩^{せんぱい}の筆^{ひつ}跡^{せき}ってクセが強いですからね。逆にマネしやすかったですよ」

「あつさりと白状するな、オイ」

亜月は、パッキーをベンに見立ててなにやら書くマネをしている。

「あのな、俺の手紙を見たのまではないとしても、なんなんだ、あの追伸は！ おまえの姉さんじゃなきゃ、ケンカを売ってるのかと思われてたぞ！」

「ウチの姉は天使系ですからねえ……人の悪意^{どんかん}つてものに鈍感^{どんかん}で」

「悪意を仕込んだ本人が、なにをのんきに……」

あなたが好きです、でもあなたの妹のほうをもっと好きです。

そんな告白があるか！ もしそうだったとしても言う必要ねえよ！

「天詞は天詞で、亜月への斬新な告白だとか勘違いしてたしな……」

「さすが我が姉、天然にもほどがありますね。彼女の将来が心配です」

「他人事か！ ごまかすの大変だったんだぞ！」

「ごまかせたら、お姉ちゃんへの告白がマジだったことになりませんか？ その辺、どうしたんですか？」

「なにもかもごまかした」

「力強いなー。ともに告れないくせに、変なところだけ強引っすね」

やかましい。

彩陽には、とりあえず手紙のことは忘れてくれと言っておいた。

誤解は解けても、決死の告白そのものをなかったことにしてしまった。辛い。

「つか、なんなんだ。なんで俺の……こ、告白を邪魔したんだよ！」

「だって、大好きな先輩が誰かのものになっちゃうなんて……亜月ちゃん、我慢できない」「なにが。我慢できない」だ。面白がつるだけだろ」

この天詞亜月は、ほんの二ヶ月ほど前に入学したばかりの一年生。

俺がこいつと出会ったのもその頃だ。

二年生は入学式に出席する必要はないが、俺は手伝いに駆り出されていた。

その入学式会場で、明るい茶色の髪に美貌、さらに入学式だというのにブレザーの下に

パーカーを着た一年生は目立っていた――

というより、悪目立ちしていた。

名門校である貴秀院では、制服は学校の指定どおりに着ている生徒が大半だ。

着崩すにしてもブレザーではなくカーディガンなどを羽織るくらい。

パーカーなんか着てるのは、ごく一部のアホだけだ。そう、本物のアホだけ。

入学式にパーカーで現れた生徒は、亜月が初めてではないだろうか。

実のところ、俺は最初に亜月を目撃したときは天詞彩陽の妹だとは知らなかった。

今年一度を越したアホな一年がいるな、と思った程度だ。

しかし、そのアホな一年とちよつとばかり関わりを持ってしまい――入学直後からやたらと絡まれるようになった。

後輩女子に「先輩」と呼ばれてなつかれるのは悪い気はしないが、最近は亜月のウザい性格もあって悪い気がしてきている。

そこに来て、謎の告白妨害だ。

「いたい、この後輩はなにを考えているのやら。
「くそつ、あのとき廊下で変な奴に気づいてたのに！ 亜月をとつ捕まえて、なにを企んでるか吐かせておけばよかった！」

「吐かせるだなんて、穏やかじゃないっすねー。でも、待ってください」

亜月は、くわえたバツキーをお行儀悪くぶらぶらさせている。

「あたしだって、意味もなく人の恋路の邪魔をするほど野暮じゃないですよ」

「してるじゃねえか。野暮じゃねえか」

「ただ面白がつて邪魔したわけじゃないんです。それだけのことをしたからには、もちろんあたしも代償を支払う覚悟くらいはあるんですよ？」

「代償……？」

俺が首を傾げると、亜月は手招きしてきた。ベンチに座れるということらしい。

特に逆らう理由もなかったので、亜月の隣に腰を下ろす。

「ね、先輩」

「うおっ」

とたんに、亜月がずいっと身を乗り出して顔を近づけてきた。

「告るの、邪魔しちゃうってごめんね？」

「……ずいぶん素直に謝ってきたな」

「あたしは、いつも素直で可愛いですよ。で、そんな亜月ちゃんとしては先輩の真面目な告白を邪魔しちゃったの、悪いと思ってますから」

亜月は、俺に寄り添うようにくっついてくる。

姉に劣らない、ふくよかな胸のふくらみが俺の腕に当たっている。

「だから、お詫び。先輩がお姉ちゃんにしたいこと、あたしに全部していいですよ？」

「……………！」

思わずぐくりとつばを飲み込んでしまう。

天詞彩陽に告ってから、やりたかったこと？

そんなもの、いくらでもあるに決まってる。

一緒に登下校したり、教室でどうでもいい話に興じたり、もちろん休日には二人でデ-

トに出かけて、映画を観たりショッピングをしたり。

男女交際未経験の俺には、シヨボい想像しかできないのが残念だが。

俺だって健全な男子高校生だ。彩陽のような可愛い女の子を彼女にできれば、スキンシップ的な意味でやりたいことは山のようにある。

むしろ、そっちのほうがいいと想像してしまう。

あるいは、男女交際の経験が豊富な者では逆に思いつかないようなことまで。

亜月は性格には大いに問題があるが、可愛いことは間違いない。

幼さを残しつつも整った顔に、丰满な胸のふくらみ。

腰はきゅっと締まっているし、短いスカートから伸びる足はすらりと長い。

俺は、またもやつばを飲み込んでしまった。

彩陽にしたかったことを、亜月にやってもいい……？

「亜月、そんな冗談を……」

「……冗談だと思っくんですか？」

亜月はせつなそうな目で、俺の顔を見上げてくる。

時間が止まったかのように、見つめ合うことしばし――

「あづ——ぶっ!!」

なんとか言おうと開いた俺の口に、亜月がくわえていたパッキーが突っ込まれた。

「にやははははっw」

亜月は唐突に笑うと、パッキーをかりつかじり取り、もぐもぐと食べる。

俺の口に、チョコレートの甘みとかすかな苦みが広がる。

「それ、お詫びです。食べてみると意外と美味しいんですよ」



「……安い詫びだな」

やむなく、俺はそのままお菓子を食べてやった。

「もちろん、あたしはそんなケチじゃありませんよ」

亜月は、パッキーの箱をボンと手渡ししてくる。

「なんと箱ごと。うわー、大盤振る舞い。亜月ちゃんに感謝してくださいね！」

「あ、おいっ」

亜月はそう言うところりと身を翻し、スカートの裾も翻して走り去ってしまう。

「なんなんだ、あいつは。箱ごとって、食べかけじゃねえかよ」

甘いものは好きではないが、食べ物を粗末にするのはもつと好かない。

ここで食べてしまっしかなさそうだ。

「……………」

正直なところを言おうと。

告白を邪魔されて腹立たしく思うと同時に、ほっとしているところもあった。

成功しても失敗しても、状況が変わるのが怖くないと言ったら嘘になるからだ。

追伸のせいで、彩陽は俺の告白を本気だとは思っていない。

からかったと思われるのは困るが、本気の告白だと思われるよりはマシかもしれない。

「なにしてんだろうな、俺は……ん？」

パッキーの箱の中に折りたたまれた紙が入っていた。

取り出すと、どうやらノートの切れ端らしかった。

「なんだ、これ」

開いた紙には、六つの文字。

「ごめんなさい。」

「……わざわざマルをつけるとか、あいつ意外とマメだな」

つか、怒られるのがわかっててこんなもん仕込んでたのか。

それなら、やらなきゃいいのに——俺は苦笑いしつつ、パッキーを一本齧った。

やつぱり甘いのは好きじゃない。



あたしは、甘いのが好き。

お菓子はこの世で最強の食べ物。お菓子さえあれば、ご飯何杯でも食べられる。

あたしの先輩はクソみたいな人だけど、お菓子が好きじゃないというのが一番どうにかしてる。

たとえ飢え死に寸前の人だろうと、お菓子を分けてあげたくないあたしが！
このあたしがお菓子を箱ごとプレゼントして喜ばないってどーゆーこと？
先輩の野郎には、いつか思い知らせてやらないと。
遂にお姉ちゃんに告りやがったし。

いつまでも、のほほんと可愛いだけの後輩を演じてられない。のほほん、だめ。
でも、一つだけ。

いや、まさかラブレターとは思わないじゃん？

先輩が机になにか仕込んでるな〜見てやれ〜っていうのはひどかったけど、呼び出しの手紙だろうと思ってたんだよ。

ラブレターなんて、存在そのものが頭になかったってば。

便せんを見てすぐにラブレターだって気づいたけど、読み始めたらずまれないじゃん？
実はビリビリと破つてやりたくなつたのは、秘密。

その気持ちを抑えるには、ちよつとしたいたずらを仕掛けるしかなかった。
なにもかも、あたしは勝手。

ごめんね、先輩。

2 もうあたしを好きでいいんじゃないですか？

風堂理玖の朝は早い。

五時には起きて、布団から机に直行して一時間ほど勉強する。

頭を目覚めさせるのが目的で、軽く授業の予習をする程度だ。

我が家は、俺が幼い頃から父親と二人だけ。

ずっと2LDKのアパート暮らし。その室内はどこも散らかっている。

がさつな男所帯がそう片付いてるはずもない。

はつきり言つて、俺も親父も家事に関しては無能だ。

最低限の掃除と洗濯くらいはするが、アパートの部屋はカオスと呼んで差し支えない。

今のところ、カオスを打ち払う光の勢力は現れてくれない。

お掃除の業者を呼ぶほどの経済的余裕は、風堂家にはないのだ。

朝の勉強を済ませ、適当に掃除と洗濯をしていると、いつの間にか父親は出勤している。
狭い家なのに顔を合わせることもないが、寂しいと思うほど子供でもない。

俺は適当に朝食を済ませると、家を出て学校に向かう。

幸い、貴秀院高校はウチのアパートから徒歩圏内だ。
交通費がかからないのは大変助かる。

早くに登校する必要はまったくないのだが、家にいても別にやることはない。
だったら、朝からエアコンが効いていて快適な教室で勉強したほうがいい。

「あ……………」

教室の扉を開けると、いきなり彩陽がいた。

隅に置かれた棚の上にある花瓶に、花を生けているところだった。

彼女も朝が早い生徒の一人だ。

今日も艶のある黒髪が美しく、花を見つめている横顔はいつまでも眺めていられる。

思い出す、あのときのことを——天詞彩陽に恋してしまった瞬間を。

貴秀院に入学してから半年、学園祭の日に彼女と過ごした時間を。

天詞彩陽と初めてまともに言葉を交わしたのは、一年生の学園祭だった。

といっても、トータルではんの数分のこと。

だが、その数分が俺の学校生活の大きな転機となった。

学園祭の喧噪から離れた裏庭での、彩陽と過ごした短い時間、短い会話が今の俺の原動力だ。

残酷なまでに学力至上主義の学校で俺がトップに昇り詰めるに至った、そのきっかけ。

俺は、平凡な公立中学の生徒だった。

少しばかり成績がよかったからと、最高の名門私立である貴秀院を受験しようと考えたのがそもそも無謀だった。

その無謀な挑戦は成功して、ネックだった高額な学費も特待生枠に入れたことで問題ではなくなった。

どうも、入試でよほどの高得点を取ってしまったらしい。

合格すら怪しかったのに、特待生にまでなれるとは夢にも思っていなかった。

もっとも、裕福な家庭の子女が多い貴秀院では、学費免除の特待生枠が埋まることはほとんどないそうだ。

入試である程度の点数を取って、特待生の申請を出せばまず通るとか。

俺はそんなことも知らずに、奇跡が起きたと浮かれていたが——

奇跡はそこまでだった。
入学して最初の定期テストでは、驚きの学年最下位。

総合成績…475／475

成績表に記された、一年生の四百七十五人中ビリという数字を見たときには、本気で心臓が止まるかと思った。

その後の定期テスト、実力テストなどでも同じような成績が続いた。

入試での好成绩は奇跡ではなく、手違いではないかと本気で疑ったほどだ。
優等生が集まる貴秀院では、成績がものを言う。

成績が公表されるのは上位五十名だけとはいえ、どういうわけか誰が下位にいるのかは公然の秘密となっている。

貴秀院は高校のみだが、ほとんどの生徒が名のある名門私立中学の出身だ。

俺のような平凡な公立中学出身の生徒は、それだけで悪目立ちするというのに、その上で成績下位ともなれば貴秀院ではゴミカスのようなものだ。

ゴミカスのまま半年が過ぎ、学園祭の時期がやってきた。

その頃には俺はもう成績を向上させようなどと一ミリも考えていなくて、完全にふてくされていた。

宝くじで大金を当てた人間が破産することは珍しくないと聞く。

奇跡は幸運の入り口ではなく、不幸への落とし穴なんじゃないだろうか。

入学以来、どん底に落ちたままの俺には、そうとしか思えなかった。

ふてくされた俺は、学園祭でも校内の喧噪から逃げるように、一人で裏庭にいた。

そこに現れたのだ、彼女が——天詞彩陽が。

もちろん、学年一の才女である彩陽のことは以前から知っていた。

実は、知っていたどころではないのだが——

そんな彼女とのほんの数分の会話が、俺をあつさりと変えてしまった。

すねて、ふてくされて、すべてをあきらめていた俺に——笑顔と励ましの言葉をくれた。すっかりひねくれた俺には、なにを言われても学年首席サマからの上から目線の言葉にしか聞こえないはずだった。

なのに——

彼女の笑顔と言葉は、不思議なほど俺の心を強く打った。

下を向いていた俺に、空を見上げることを思い出させてくれた。

「笑われたっていいから、前を向いてやりたいようにやればいいと——そう思います」

こんなことを心からの優しい笑顔で言われてしまったら——

そんなもん、好きになるだろう？
好きになってしまったあとは――

彩陽の整いすぎているほどの容貌、明晰な頭脳、それに裏表のまったくない天使のような性格に惹かれる一方だった。

どん底にいては、彼女から遠すぎる――やるべきことは決まった。

そうだ、笑われたっていい。

実際に笑われた。

俺が学園祭のあと、休み時間も必死に勉強している姿を見て、クラスの連中は公立出身で成績下位をウロウロしていたザコがなにを頑張ってるんだとクスクス笑っていた。

だからなんだ？ 今はおまえたちが上でも、俺が目指しているのはおまえじゃない。

俺が目標と決めた彼女は、笑っていなかった。俺のことを特に意識しているようではなくても、彼女が努力している姿を笑う人間でないのはわかってる。

だから誰に笑われようが、前を向いて――死に物狂いで机に向かい続けた。
いつか、彼女を追い抜く日を夢見て。



以上、簡単ながら回想終了。

そして今日も、彩陽が花を生けているだけの姿に見とれてしまいうわけだ。

一年生の学園祭からもう八ヶ月にもなるのに、未だに彼女から目が離せない。

「あ、おはようございます、風堂くん」

「……………っ！ お、おう……………」

ぼんやり眺めていると、彩陽が俺に気づいてこちらを向いた。

今日も黒髪はサラサラ、肌はつるつる、文句のつけようのない美少女だ。

彩陽は、クラスの誰にでも物腰が柔らかい。

朝の挨拶をするのはもちろん、きちんと名前を呼んでくれるところがいいのだ。

「いつも早いですね、風堂くん」

「あ、ああ、そういう天詞こそ早いな。その花、天詞が持ってきたのか？」

教室の隅に置かれた棚の上にある花瓶に生けられているのは、青紫色の花だ。

「ええ、菖蒲です。お家の庭から持ってきました。教室にもお花くらいあったほうがいいと思います」

彩陽は、にこにこ嬉しそうだ。可愛い。

花より君のほうが綺麗です、なんて齒の浮く台詞が飛び出しそう。

いや、今は他に言うことがあるか…………。

「あー、あのな。天詞…………」

「はい？ あつ、あの…………その、昨日は申し訳ありませんでした！」

彩陽は、はっとしてぺこりと頭を下げた。綺麗な黒髪がサラッと揺れる。

「え？ いや、いや、天詞が謝ることはないだろ」

「いいえ、もしかするとわたし、またなにか勘違いしたんじゃないかと。考えてみれば変なお話ですよ。わたしを経由して、亜月ちゃんに——なんて」

「……………」

よかった、天然な彼女だが真実に気づいてくれたようだ。

「あ、こんなところじゃダメですよ。ちょ、ちよつとごめんなさい」

「……………っ！」

彩陽が俺の手首を掴んで歩き出し、教室を出て、廊下をずんずん進んでいく。

廊下の一番奥は、空き教室になっている。

彩陽は、その空き教室の前で立ち止まると——

「え、えーと、あんなお手紙を書いたのは理由があったのですよね？ あらためて、ちゃんと聞きしますから。どうぞ、お話を」

……これだ、これだよ。

俺は、彩陽が掴んだままの手首にちらっと視線を向ける。

天詞彩陽は、学校中に知れ渡った優等生。しかも、アイドル顔負けの美少女。

それでいて、たまに男が勘違いしかねないこういう行動を取る。

無駄に距離に近い女子は他にもいるが、彩陽のような清楚な女子が気軽に触れてくれば、馬鹿な男子が勘違いしないほうがおかしい。

しかも、本人は本気で自覚がなさそうなのだ。

これを天然と言わずして、なんと言う。

「あ、すみません……急に言われても難しいでしょうか。わたし、ちょっとせっかちで」

「いや、いいんだ。でも、言わせてくれ。あの追伸は天詞をからかったんじゃないか——」

「おつはようございます、理玖先輩っ！」

ふわわーっ、と浮かれた足取りで現れたのは天詞亜月だった。

お馴染みの校則ガン無視のパーカー姿に、超ミニスカート。

今日は、髪をシュッシュで結んでいる。こいつは頻繁に髪型を変えるのだ。

そして背中には、ド派手なブリズムカラーのリュック。

学校指定の地味なナイロンバッグを持つ気など一ミリもない、という覚悟を感じさせる。

「あ、お姉ちゃんもおはよう。いつも早いよね」

「おはようございます、今日はお早いですね。朝の空気は気持ちいいでしょう」

「えー、気持ちいいことなら他にいくらでもあるよ？ お姉ちゃんくらい美人なら、気持ちよくさせたい野郎どもがいくらでも——」

「おいこら、亜月！ おまえ、人のクラスメイトになを吹き込んでるんだ！」

「……先輩のクラスメイトである前に、あたしの姉なんですけど？」

「そういえば、そうだった」

「ふふふ、なんのお話かわかりませんが、楽しそうですね。風堂くん、ウチの妹と仲良くしてくれてるんですね。ありがとうございます」

彩陽は、深々と頭を下げた。

「……あつ。ということは、やっぱり風堂くんは亜月ちゃんのことか——？」

「いやいや、全然違う！ こいつは、なんかその辺にいる一年生だ！」

「ひどいですよ、先輩！ あたしは、その辺にいるウザい一年生ですよ！」

「おまえの自己評価のほうがあつくないか？」

「これでも謙虚で健気で可愛いんですよ、あたしは」

「そのうち二つは、おまえの真逆じゃねえか」

「二つってどれです？」

「……さあ、どれかな」

しまった、口が滑った。亜月がニヤニヤしてるのがうつとうしい。

亜月は、さすがに彩陽の妹だけあって顔の造作が整っていることは仕方なく認めざるを得ない気がする今日この頃だ。

「つか、亜月。おまえ、なんでいるんだよ。早起きするキャラじゃねえだろ」

「あ、ごまかされました。まあ、いいけど。先輩が怪しい動きをしてるんじゃないかと、亜月ちゃんレーダーがピンピン反応してたので！」

「怪しい動きをしてんのはおまえだろ……」

亜月に高性能レーダーが搭載されていたら、俺の手に負えない。

「あー、亜月ちゃんは小さい頃からカンがよかったですね。わたしは、そういうのは逆にさっぱりで」

そういう、鈍いところもいいんだよ。

「なので、風堂ちゃんと亜月ちゃんがそこまで親しいのも全然気づきませんでした。いつから、仲良しだったのでしょうか？」

「あたしと理玖先輩は、こういう関係だからね」

「あつ、おい！」

亜月は、ぴよんと軽く跳ねて俺に抱きついてくる。

背伸びして俺の首筋に腕を絡め、頬がくつきそうなほど顔を近づけてきた。

「えつ、えええ……？ こ、こういうご関係というのは……！ ま、まさか、告白して昨日の今日で……？」

「ち、違う！ だから、あのラブレ——手紙のことは忘れてくれ！」

俺はくつついてきた亜月の顔を、強引に押しつける。

「俺をからかって遊んでるんだよ、亜月は！」

「いえいえ、遊ばれてるんです。入学式のあと、いきなりナンパされたんでしたよね」

「どんな捏造だよ！ 入学式のあと、おまえが絡んできたんじゃないか！」

そう、俺と亜月との出会いをもう少し詳しく描写すると——

式を終えれば新人生は教室に行つて、担任のありがたいお話を聞いたり、教科書を受け取ったりする。

ところが、俺が入学式の手伝いを終えて帰ろうとすると、例のパーカー一年生が一人でふらふら歩いて行くのを見かけた。

ふてくされモードが終わろうが、俺は別に親切な人間じゃない。

しかし、校内に不慣れであろう一年生が一人でウロウロしているのを見過ぐすほど他人に無関心でもない。

単純に教室に向かう途中で迷ったのだろう、とパーカー女子に声をかけた。
今にして思えば、それが運の尽きだったわけだが……。

「ナ、ナンパ……いえ、出会いの形はなんでもよいと思います」

「よくねえよ。ナンパでもないし」

「あの、風堂くん……やはり愛なのですか!？」

「……………愛？」

「え、ええ……ウチの亜月ちゃんを愛してるということなのですよね？」

「……………」

俺は、ふいっと亜月のほうに目を向ける。

「おい、おまえのお姉さんってズレ方がハンパねえけど、どうやって育ったんだ？」

「おかしいですね、あたしと同じもの食べて育ったはずなんですけど」

二人でひそひそと話し、揃って首を傾げてしまう。

「そ、そんなに二人で顔を寄せ合って……あの、亜月ちゃん？ お付き合いするのはいいのですが、天詞の者としての節度はできれば守ってくださいね？」

「ハーイ、お姉ちゃん。毎朝、ちゃんと基礎体温は測っておくね！」

「どんな節度の守り方だよ！」

妹が回りくどい下ネタを言う一方、姉のほうは「基礎体温と節度になんの関係が？」と首を傾げている。わからなくてよろしい。

「と、とにかくだな。俺は別に亜月のことは好きでもなんでもない」

「……………えっ……そ、そうなんですか……いい、良い子なんですけどね……」

「……………」

好きな女子に、まるでこの世の終わりみたいな顔をされてしまった。

俺にはウザい上にろくでもないイタズラを仕掛けてくる後輩だが、彩陽にとっては可愛い妹らしい。

彩陽は身内に騙されていないだろうか？

「あたし、良い子なのに……ぐすっ」

「おまえは自分で言うな」

わざとらしい嘘泣きも禁止だ。

「あ、でも先輩ってあたしをイジめたあとは、すっごく優しくしてくれるんですよ」

「DVの手口じゃねえか」

「や、優しいのはいいことです。風堂くんは優しい方なんです」

「……………」

どうにも誤解は解けないらしい。

亜月がウザくて面倒くさいというより、彩陽の天然のほうの問題かもしれない。

「あの、風堂くん」

「な、なんだ？」

「わたしは、その、お付き合いとかはよくわからないんですけど……亜月ちゃんのこと、好きなら応援しますの！」

「……………」

ぐはあああああつ……………！

漫画なら、太陽を浴びた吸血鬼のように灰になっているところだ……。

お、応援します……応援しますつて……！

つまり、俺のことなんて好きでもなんでもないってことじゃねえかあああ！

「あーあ、我が姉ながら残酷なこと……」

亜月が呆れているが、どうでもいい。それより――

なんで告つてもいないのに、フラれなきゃいけねえんだよ……！

「今日のオヤツは、クアールです」

「……………」

クアールは農家のおじさんのイラストで有名なスナック菓子。

両端がくると丸まった形が可愛い。

放課後、裏庭。

帰ろうとしたところで亜月に捕まり、またこんなところに来てしまった。

今日も俺たちの他に人影はなく、古びたバスケットゴールも退屈そうだ。

ベンチに座っている亜月はクアールの袋を開いて、さつそくポリポリと食べ始めた。

「……クアールって生産中止じゃなかったか？」

「西日本ではまだ売られてるんですよ。お金にものを言わせて取り寄せてます」

「まあ、結局ものを言うのは金だよな」

「言つときまずけど、お姉ちゃんはお金ではなびきませんよ」

「それくらいは、さすがにわかつてる」

貴秀院は上流家庭の令息令嬢が多い学校だが、天詞家はその中でも一、二を争う財力を

持っていると聞く。

俺には、金のことなどどうでもいい。彩陽が金持ちだから好きなわけではない。

「つーか、おまえな！ 今朝のアレはなんなんだ！」

「おっぱいの押しつけ方が足りませんでしたか？」

「スキンシップ不足だと言ってるんじゃないやねえよ！ なんで天詞の目の前で抱きついてくるんだよ！ イヤガラセか！」

「お姉ちゃんの目の前でなければ、抱きついていいと？ 先輩、姉と付き合う前から浮

気の兆候が見えてますよ」

「おまえ、ホントざけんなよ」

この先輩を先輩とも思わない態度と言ったら。

昨日の、菓子箱の中の「ごめんなさい」はなんだったのか。

「ラブレターも追伸も、まとめてごまかしたはずなのに、元の木阿弥のような……」

「パイセン、そんなに気にしなくても。お姉ちゃんも、先輩が遠回しにあたしに告ってると思っただけでは？」

「最悪じゃねえか……」

好きな女子に、彼女の妹が好きだと思われてるとか。

「つーか、もうあたしを好きでいいんじゃないですか？」

「よくねえよ」

俺がじろりと睨むと、亜月はぼりぼりとクアールを食べながら外国人のように肩をすくめる。

「あたし、これでも男子には人気あるんですよ。めちゃめちゃおっぱいとかスカートとかガン見されてますから」

「身体目当てじゃねえか」

亜月は顔も可愛いことから、もつと見てやれ——そうじゃない、この後輩のモテ自慢などはどうでもいい。

「別にあたしはいいですよ。先輩はお姉ちゃんが好き、あたしの身体も好き、でも」

「おまえは俺を人間のクズにしたいのか？」

あのラブレターの追伸は、受け止め方次第ではまさに俺が人間のクズに思われるのが問題だ。

「だいたい、先輩って勉強以外に取り柄ないじゃないですか。ウチの姉に告って、勝算あるんですか？」

「ズバツと言いやがるな。俺は、勝算がないと告白もできない男にはなりたくない」

「うわーい、おつところしいーw」

「というかな、亜月。昨日のしおらしさはどこへ行ったんだ？」

「ああ、バックキーの箱に仕込んだアレですね。あんまおちよくりすぎるとガチで怒られそうだから、適当にクールダウンさせようと思って」

「本人の前で言うな、本人の前で」

「まー、でも凄（すご）いとは思いますが。本気で好きとか言えるのって」

「……天詞に告（つ）げてる男は山ほどいるだろ」

「そんな身の程（ほど）知らずは少ないんじゃないですか？ お姉ちゃんは、誰（だれ）だに告（つ）げられましたなんて人に言うほど無神経じゃないですけど」

「無神経じゃない女子は素晴らしいな」

「ですよ。無神経、ヨクナイ」

天使の妹には皮肉が通じないようだ。

あと、さりげに俺を身の程知らずとデイスってねえか？

「でも、理玖先輩はラッキーですよ。なにしろ、告（つ）りたい相手の妹が味方についてるんですから。ほら、言うじゃないですか。将（い）を射（は）んと欲（ほつ）すればお馬さんバカパカと」

「最後まで覚えてないなら、適当言うなよ……」

この後輩は、貴秀院を無事に卒業できるのだろうか。

「だいたい、俺は亜月にサポーターしてもらおうと思ってるよ」

「あたしから、お姉ちゃんの情報を引き出そうとしてたくせにw」

「くっ……た、たいしたことは聞いてないだろ。俺は、自分の力で正々堂々と告（つ）るんだよ」

「ラブレターって正々堂々っすかね？」

「……もうラブレターのことは忘（わす）れよう」

「ただ、あたしに協力してもらえのだった先輩のお力ですよ？ お姉ちゃんを好きな人は山ほどいるでしょうけど、その人たちを手伝おうとは思いませんもん。先輩だけ……特別だよ♡」

つん、と亜月が頬（ほ）をつついてくる。大変にうつとしい。

「つーか、おまえ協力してないだろ！むしろ積極的に邪魔（じゃま）してるだろ！」

「先輩があたしに抱（だ）きつかれて、お姉ちゃんは胸（む）がズキッと痛んで……『やだ、わたしったらもしかして風堂くんのこと……？』ってなるわけですよ」

「なるか、そんなもん！おまえは漫画の読みすぎだ！」

「ちつつつ、あたしが読（よ）んでるのはラノベですよ。こう見えて読書家なんです」

「ラノベも読書に入（い）るのか？ あんなの、児童書に毛（け）が生えたようなもんじゃねえ？」

「敵を増やす発言ですね。今は新聞でもラノベが紹介される時代ですよ。まあ、そのうちオススメのラノベを百冊くらい貸しましょう」

「多いわ。イヤガラセじゃねえか。おまえは、普通にできることはないのか？」

「告白が上手くいかなくて凹^{へこ}んでる先輩を慰^{なぐさ}めることくらいですかね。クアール、どうです？ これは甘くないですよ？」

「亜月、そんなもんばかり食ってたら太るぞ」

「あー、浅はかつすね。女子に太るぞって言えばダメージを与えられると思ってますね」

「亜月にだけは浅はかと言われたくねえなあ」

「でもほら、あたしって全然太ってないでしょ。見てくださいよ」

亜月は、普通にパーカーの裾^{すそ}をめくって、白いお腹^{なか}をあらわにする。

腹から腰にかけてのラインは見事にくびれていて、確かに贅肉^{ぜいにく}は見当たらない。

「……見せていい」

「きゃーっ、先輩、照れてるーっ！ ちょっと、ちょっと、女の子のお腹を見たくらいで照れるとかピュアですかw」

「俺が見たい腹は、天詞彩陽の腹だけだ！」

「……すげーマニアックな台詞^{せりふ}。好きな女子のお腹が見たいとか……」

「ま、待て。特に腹フェチってわけじゃなくて……」

「俺が見たい腹は、天詞彩陽の腹だけだ！」

「つて、おい！ なにを録画してるんだ!？」

いつの間にか亜月がスマホを持っていて、先ほどの名シーンの動画が再生されていた。

「あたしは、先輩をソンケーしてますからね。いつ何時^{なんどき}、名言をいただいてもいいように、常に動画撮影^{さつえい}のチャンスは窺^{うかが}ってます」

「弱^{よわ}みを握^{にぎ}る気満々じゃねえか……」

隙^{すき}を見て亜月のスマホを跡形^{あとがた}もなく破壊^{はかい}しよう。

亜月は、一人で残りのクアールを食べ終わると、袋をそぼのゴミ箱に放り込んだ。

「俺はなにをしてるんだろうな。こんなところ、天詞に見られたら余計に誤解される……」

「お姉ちゃん、先輩のこと好きでもなんでもないんですから、誤解もなにも気にしなくていいでしょ？」

「言い方！」

いちいち、亜月の言うことが正しいのがとても困る。

「ま、お姉ちゃんは誰^{だれ}にでも優しいし、誰だろうと良いところを見つけて好意を持ちますけど、だからこそ恋愛^{れんあい}できないんでしょうね」

「なんだ、それは……」

「ウチの姉は手強いって話ですよ。あの人の特別な存在になるのは生半可なことじゃないです」

「……そうだな」

これこそまさに亜月の言うことが正しい。

彩陽が俺に優しいのは、恋愛感情があるからではない……。

俺はベンチから立ち上がり、校舎に向かう。

「あれ、どうするんですか、先輩？」

「帰るんだよ。ここにいたってしゃーねえし、今日は教室で居残り勉強する気分でもないしな」

追いかけてきた亜月のほうを振り向きもせず答える。

「待って、待って、待ってくださいよー」

「ついてこなくてもいいだろ」

「どこまでもついていきますよ。あたしは、先輩の告白を邪魔しちゃった罪をまだ償ってませんからね」

「そんなの、もういい。済んだことより、これからどうするかが問題だ」

「けつこう男らしいんだよなあ、この人。割り切りが凄いいつか」

「けど、おまえは反省して自分を見つめ直せよ。俺は亜月を許すが、亜月が自分を許せるかどうかは別問題だ」

「あたしは、悪いことばかりしてるので自分を許せるタイミングがないですね」

「さらっと凄いいと言いやがるな……」

「それより、先輩。一つ大事なことを忘れてませんか？」

「ん？ なにかあったか？」

「まず、これでどうでしょう♡」

「これって……おっ、おいっ!？」

俺が立ち止まると、亜月はその手を取って自分のほうへと引き寄せてきた。

亜月は、またパーカーの裾をめくって、白いお腹とおへそがあらわになっていた。

彼女は引き寄せた俺の手を、そのお腹にほんと置かせる。

「あたし、言っただけじゃないですか。お姉ちゃんにシたいことをしちゃっていいって。お腹、好きなんです。どうです？」

「……………」

亜月のお腹は、無駄な肉が少しもなくて、それでいて柔らかく、つるつるすべすべとし

ている。手に伝わってくるのは、驚くほどしなやかな感触だ。

「お腹はマニアックですよ。ね。なんなら、もうちょい上、いつときます？」

亜月は楽しそうに言う、俺の手を掴んだまま上のほうへと滑らせていき、めくり上げていたパーカーの裾をさらに持ち上げていく。

お腹どころか、ちらりとレースの黒いブラジャーが――

「つて、なにしてるんだよ!？」

ぱつと亜月の手を振り払う。亜月もパーカーの裾を離し、あらわになっていたアレコレが隠れる。

「あとたとえば、お姉ちゃんのおっぱい揉みたいで」

「揉みたいに決まってるんだろ!？」

「食い気味に言われた! だから、あたしが代わりにって話ですよ!」

「……亜月がそこまでする必要はねえだろ?」

ふと思いついた疑問を口にする。

いや、とづくに思いついていてもおかしくないのに、なぜ気づかなかったのか。

「追伸のことがあるにしても、なにをしてもいいっていうのはどうなんだ? おまえがそこまで身体を張る理由、あんのか?」

「なにをしてもいいとまでは言っていないですけど……そうですね」

うーん、と亜月は腕組みして考える。

「こんな悪いことばかりしてるあたしでも可愛がってくれる人がいれば、一緒に遊びたいじゃないですか」

「それ、俺の質問の答えになってるか?」

「なってるませーん♡」

亜月は、にやりと笑い、ひらひらとスカートを翻しながら、俺の周りをぐるぐると回り出す。

「大丈夫ですよ、先輩が好きなのはお姉ちゃんだってことだけはわかっていますから」

「……? それも、俺の質問と関係ないよな?」

「はいっ♡」

「……………」

まったく、わけのわからない後輩だった。

俺にとっては好きな女子の妹で、割と面倒くさい後輩。

間違いなく、それ以上でもそれ以下でもない関係なのだが――

気がつけばそばに居るのは、この天詞亜月であることも事実だった。

「さて、そろそろ本題に入りましょうか」

「んん!? こんだけ長々と話しておいて、まだ本題に入ってなかったのか!」

そういえば、なぜ裏庭に連れてこられたのか、まだ訊いてなかった。

それに気づいてなかったあたり、俺は相当凹んでる。

「亜月ちゃんはですね、いいことを思いついたんですよ」

「……………」

「あつ、その顔! 絶対、ろくでもねえこと企んでるだろ的な顔ですね!」

「よくわかってるじゃねえか」

「ふふん、そんなこと言ってられるのも今のうちですよ。すぐに先輩は、亜月ちゃん様、どうかわたくしめに救いの手を!」と哀れにすぎることになるんですから」

「絶対、そんな未来ありえねえ……」

嫌な顔をする俺に、ニヤニヤと笑いかけてくる亜月。

気がつけばこいつがそばにいることに、もっと危機感を持つべきかもしれない。

3 亜月ちゃんルートは本気です♡

「つまり、先輩にはビジョンが足りない!」

「……なんなんだ、いきなりデイスかよ」

翌日、朝。

亜月が偉そうに裏庭に呼び出しをかけてきて、仕方なく応じている俺。

なんだかんだで、俺ってこいつに甘くないか……?

俺はベンチに座り、亜月はその前に立って古代ギリシャのアジターターのように執弁を振るってる。

「先輩のビジョンって言ったら、姉に告りたい、OKをもらってお付き合いしたい、できるだけ早くセッ——」

「はい! もったいぶらずにさっさと本題に入ってくれ!」

朝っぱらから性の話なんか聞きたくねえ。

「では、これです。見てください」

亜月は例のプリズムカラーのド派手リユックから、iPadを取り出して、画面を俺に

見せてくる。

「これって……なんだこりゃ？」

i Padの液晶画面には、太い棒線が縦に一本引かれて、その線の途中にいくつも箱が並んでいる——電車の路線図みたいだ。

「先輩よ、理玖先輩よ。あなたは確かに勉強を頑張りました」

「おまえが神か？」

「がむしやらに頑張つて、お姉ちゃんに試験で勝つという快挙を成し遂げました。ですが、そのあとがよくない」

「なに？」

「先輩、試験で勝つたら告る」というところで思考停止してましたね？」

「……告るのに思考もなにもいらねえだろ？」

ちよつと図星——確かに泥縄ではあった。

どうやって告るか決めないまま試験で勝つて、そのまま勢いに任せてラブレターなどを書いてしまったが——

「だいたい、それと路線図になんの関係があるんだよ？」

「路線図じゃないです、フローチャート」というやつです。ゲームの攻略サイトとかで

よく見るでしょ？」

「フローチャートくらいは知ってるが、俺ゲームはほとんどしなない……」

中学までは友達に付き合つて遊ぶこともあったが、わざわざ攻略サイトを見るほど熱心でもなかった。

ゲーム機も持っていないし、ソシャゲのたぐいもサッパリだ。

「あたしはラノベ好きで有名ですが、実は一番の趣味はゲームなんですよ。特に好きなのがRPGで。レベルカンストまで上げて最強装備を揃えて、ラスボスを舐めプでいたぶるのが楽しいです」

「おまえ、暇すぎねえ？」

今時のゲームはポリウムも凄いし、いつたい何百時間費やしてんだ。

「というか、ゲームがどうしたっていうんだ？」

「では、結論から言いましよう。先輩に足りないのは——レベル上げです！」

昨日はやたらと前置きが長いかと思つたら、今度は意味不明な結論かよ。

「レベル上げとは、ゲームでダンジョンやボスに挑む前にフィールドなんかをウロついて罪もない敵をぶちのめし、経験値を稼いでレベルアップさせることです」

「さすがにそれかも知ってる。高校生で知らない奴はいねえだろ」

「だったら話は早いです。先輩は、お姉ちゃんに勝つまでがむしろに頑張った——そう言うって聞こえはいいですが、計画的に効率的に進めておけば、もっと早く勝てたかもしれません」

「そうか？ 相手はあの天詞彩陽だぞ。三年間、一度も勝てなくても不思議はないくらいだろ。二年の最初のテストで勝ただけでも奇跡じゃないか」

「いいですか、強敵に挑むためのレベル上げで、スライムやゴブリンばかりちまちま倒してたら、必要なレベルまで上げるのに時間がかかりすぎるんです。そんなやり方じゃ、姉には一生かかっても追いつけませんよ」

ズバリ、と言い切る後輩。

「これと言っておきますが、応援します。っていうのは、てめーのことは異性としては眼中にもねえよ。って意味ですからね」

「わかってる！ つーか、天詞はそんな言葉遣いはしねえだろ！」

俺が人生で最大の衝撃を受けた台詞を蒸し返すなよ！ ノーデリカシーか！

「もういっ言うと、先輩が姉にテストで勝ったことと姉に告ってOKをもらえることにはなんの因果関係もないのですよ。そんなもん、先輩が踏ん切りをつけるために必要だった

だけです。ただの先輩の都合ですよ」

「おまえ、今日はひときわズバ言いやるな……」

しかも、いちいちそのとおりなので俺の心が傷つく。

「だからって、俺にレベル上げしろって？ 具体的になにをするんだよ？」

「先輩は、確かに学力では姉を越えました。よくやったと褒めてあげますよ」

「だから、おまえは何者なんだよ」

「ですが、いくら、かしこさのパラメーターを上げても、それだけではラスボスには勝てないんですよ！」

「小学生じゃねえんだ、運動ができりゃモテるってわけでもないだろ。それに、貴秀院は進学校で、成績がものを言うだろうが」

「ああ言えはこう言いますね！ 先輩の場合はただの頭でっかちですよ！」

「ああ言えはこう言うのは亜月だろ……あんな、俺は特に取り柄がなかったんだ。だから、貴秀院に合格って奇跡を起こせた学力を武器にする以外にない。俺の全部を懸けて成績で彩陽を越えて、彩陽を越えた俺自身も越えていく」

「やべ、ちよっとかつこい……」

いや、亜月に感心されてもしょうがないんだが。

「だーっ、そうじゃないんです！ まったく恐ろしい人ですね！ 言葉巧みに純朴な後輩を丸め込もうだなんて！」

「どこが純朴なんだ……」

たぶんおまえ、全女子ぶつちぎりでスカート短いぞ。

「でも実際、先輩は姉に成績で勝ちましたけど、姉が先輩に好意を持った様子は一ミリもないでしょ。ようやく、クラスメイトAくんから成績首席のAくんになっただけで」

「Aくん扱いは同じかよ。天詞はちゃんと名前覚えてるぞ」

ツッコミつつも、亜月の言うことはこれまた間違ってる。

俺が校内一位になろうが全国一位になろうが、彩陽が俺を好きになるかは別問題だ。

「先輩、ラノベではアイドル並みの美少女が冴えない主人公を好きになるってパターンが今でも健在ですが、現実はどうはいきません。レベルの高い女子は、レベルの高い男子とお付き合えるもんです」

亜月は、さりと俺を絶望に叩き落とすつつ、iPadに彩陽の写真を表示する。

制服姿で、どこか遠くを見ていて、いかにも隠し撮りっぽい。おい、それよこせ。

「で、ウチの姉は、ちから、すばやさ、かしこさ、きようさ、みりよく、どれもパラメーターカンストなんですよ！」

「素早さなんかはどうでもよくねえ？」

忍者じゃねえんだから。

「お姉ちゃんば身体鍛練も怠りませんから、平均的な男子よりも運動能力高いんですよ。頭脳に関しては先輩が一番よく知ってるでしょう。しかも幼い頃から楽器や絵を習っていて、芸術的な素養もバツチリ。ピアノや絵画のコンクールでトップを取りまくって、コンクール荒らしになってるくらいですから」

ぱっ、ぱっ、とiPadに表示させた写真を切り替えていく亜月。

真剣な顔でイーゼルに立てたキャンバスに向かっていている彩陽、肩を出したドレス姿でグランドピアノを弾いている彩陽が表示される。

だから、写真をよこせと。

「魅力……ま、これこそ言うまでもないですね。顔はもちろん、女子高生とは思えないあのボディはエロすぎでしょう。その証拠に……つと、あの写真はまずいか」

「どんな写真を秘蔵してるんだ!？」

めちゃくちゃ気になるじゃねえか！

「とにかくですね、姉は各種パラメーターカンスト、一方で先輩は成績でギリギリ姉に勝つたにすぎません。だから、レベルを上げなきゃ姉とは釣り合いませんよ」

「……凄い結論だな。容赦ねえ」

「そ・こ・で♡ あたしが先輩のレベル上げをナビしてあげます♡」

「って、また話長えよ！ レベル上げて無理があるだろう！ 今さらスポーツ万能にも芸術家にもなれねえし、イケメンとか絶対無理だろ！」

「そうです、先輩にはたいした才能はありません」

「おい」

「だから、対彩陽に特化してステータスを上げていくんです。他の誰でもない、ただウチの姉の愛を勝ち取るためにだけにレベル上げをするんですよ！」

「愛って、おまえな……」

ようやく、本当の結論が出てくれたらしい。

それでも、まだ全貌が見えてこないが。

「先輩、貴秀院の一年生女子で一番エロ可愛いのは誰ですか？」

「今度はなんだよ。そりゃあ……俺になにを言わせようとしてんだよ」

「そうです、亜月ちゃんですよ」

うんうんと頷く亜月。まあ、否定はしねえけど。

「校内の噂に疎い先輩でも、それは知ってるわけです。つまり、天詞亜月はそういう存在

だと周囲に認識されてるんですよ。こういうのを「ブランディング」といいます」

「経済の本で読んだことはあるな……」

グ●チャヴィ●ンと言えば高級品、みたいなイメージをつくる戦略か。

「先輩には今のところ、一度だけ定期テストでトップを取った以外に特徴はないです。ぶつぎり校内でトップ人気の天詞彩陽のお相手としては、不足も良いところですね」

「おまえ、ただ俺をデイスリただけじゃねえの？」

「だから、レベルを上げて天詞彩陽に釣り合う存在として姉にアピールできるようにブランディングしていくんです」

「レベル上げだのブランディングだの……どこで聞きかじったんだよ」

「あーあー、ゴチャゴチャうるさいですよ！」

おい、いきなりキレんなよ。

「先輩のこの前の告白は悪手です。あたしは面白半分でラブレター作戦をぶっ潰しました、が無残に散らずに済んでむしろ助けてあげたと言ってもいいですね」

「今の悪口でその手柄は吹っ飛ぶぞ」

「とにかく！ あたしが用意した「ミッシヨン」をこなしていけば、最強勇者に成長して、大魔王アヤヒに挑めるようになりますよ！」

亜月は、またフローチャートを表示させて、iPadの画面をスクロールさせていく。フローチャートにはいろいろ書かれているようだが、怖くてあまり読みたくない。

彩陽に告るためのレベル上げ？ 一緒に下校するとか、手を繋ぐとか？

「ん？ チャートが途中で枝分かれしてるぞ？」

「ああ、最初からずーっと続いているラインが彩陽ルート。もう一本のラインは亜月ちゃんルートです」

「そんなルートねえよ！」

なにをしれつと！

「ゲームにはバッドエンドもつきものですよ。単純なレベル上げも、一つ間違えば死にますからね。死んじやったら、所持金が半分になったりアイテムをドロップしたりと、デスペナルティがつくでしょ」

「そりゃゲームの話だろ、ゲームの」

このレベル上げ、失敗したら亜月ルートとやらに入るのかよ。

そっちに入ったら、どんなミッションが待ってるんだよ。

「ええい、つべこべ言わない！ どっちみち先輩は最初の告白に失敗した以上、次の手を打たなきゃいけないでしょ！ なにか思いついてるんですか!」

「……これから考える」

「でしょ！ 先輩の告白を大コケさせたのも事実ですから、お詫びのためにあたしも協力してるんです。この身を捧げる勢いで！」

「身を捧げるって言い方はどうなんだ……だが、亜月にそこまでしてもらわなくても」

「先輩よりはるかに天詞彩陽をよく知ってるあたしが立てた計画ですよ。だから、このフローチャートを活用しましょう。名付けて、ロード・トウ・彩陽ボディ！」

「身体が最終目的に言うな！」

「もー、先輩ってばワガママなんだから。じゃあシンブルに天国作戦で。ウチの姉、天使（笑）とか呼ばれてますもんね」

「なんでもいいが……まさか、ガチで俺にそのフローチャートどおりに行動しろつつてんじゃねえよな？」

「この話の流れだと他にないでしょ。大丈夫、最初のミッションは確定しています。準備も始めてますよ！」

「俺の同意、取れてないだろ!」

こいつ、自分で計画を立てたら人の都合スルーで夢中になるタイプだ！

「あ、先輩。忠実な後輩の計画に乗っかるのはいいですが、なにしろあたしは天詞亜月。」

決して油断してはいけませんよ?」

「忠実な後輩に油断するなっていうのが矛盾してるが……なにをする気だ?」

「亜月ちゃんルートは本気です♡」

「なっ……」

フローチャートの二本のライン、メインのラインは黒文字。

そして、大きく横へ逸れていくもう一本のラインは赤文字になっている。

「あたしは、先輩がお姉ちゃんに告るまでのレベル上げの道をつくっていきます。でも、あたしは一筋縄ではいかない、可愛いだけの後輩じゃないですからね。道は天国へ続いています、一つ間違えれば地獄も待つてることをお忘れなく……」

「亜月ルートは地獄なのか!？」

「あたしの最終目標は、先輩を留年させて同じ学年で面白おかしく学校生活を送ることです!」

「それ、ガチの地獄だろ!」

「きゃはははっw あたしにもお楽しみがあつてもいいでしょ!」

「俺の告白を邪魔した詫びっていうのは、どこ行つたんだ!」

「さあ、先輩。先輩がたどり着くのは天国か地獄か……待っているのは、天使か悪魔か。」

楽しみですね!」

「全然楽しみじゃねえっ!」

とはいえ——ラブレター作戦が木っ端微塵に砕け散つた今、次の手は思いついていない。片思いの相手の身内が味方につくというのは、有効かもしれない。

味方そのものに大きな問題があることに目をつぶれば。

彩陽が手強いことくらい、充分に知っている。

俺の思いを叶えるには、悪魔にだって魂を売る覚悟が必要かもしれない……。



ふう、上手くいった……のかな?

天国作戦は、一晩で亜月ちゃんがやってくれましたって割にはよくデキてる。

別によくデキてなくてもよかったんだけど、こういう悪巧みだけは得意なんだよね。

先輩がお姉ちゃんに接近して経験値を稼げるミッションを組み込んでるのは、間違いない。

ミッションを全部成功させれば、マジで先輩はお姉ちゃんと付き合えるかもしれない。でもね、すべてのミッションに——罠が仕掛けてある。

実は、どこからでも亜月ちゃんルートに分岐可能。

天国作戦[△]にはむしろ不測の事態を意図的にたつぷり仕込んでいる。

ごめんね、先輩。確かに、チャートを進めれば天使が待ってるけど。

そう簡単にはたどり着けない。でも、悪魔にはとても簡単にたどり着けちゃう。

あたしは、手強いお姉ちゃんと違ってチョロいからね。

ホントにごめんね、先輩——悪魔は、自分のためにしか動かないんだよ。



——数日後。

今日は、あいにくの雨模様だ。

昨夜から降り出した雨が、朝になっても止むことなくむしろ雨脚は強まっている。

教室の外からも、ざーざーと重い雨音が聞こえてくる。

初夏は俺が好きな季節だが、今年は梅雨入り前から雨がが多いという予報で、少し憂鬱だ。

「雨が降っているわ、フドー」

「……ああ、セイラか」

休み時間、窓の外を眺めていると、一人のクラスメイトが寄ってきた。

世

良セイラ——淡く赤みがかった長い髪をサイドで結び、袖が余ったカーディガンを着

て、スカートはミニ。白のニーソックス着用。

ずいぶんと小柄で、身長は一五〇センチ以下。

華奢な身体つきで、胸もすとーんと地平線のように平坦そのものだ。

天詞姉妹の胸部を見慣れていると、同じ女子高生という生き物とは思えないくらいだ。

顔は可愛いのだが、もちろんとてつもない童顔だ。

間違はなく、小学生料金でバスに乗れる（違法）。

「雨だとしても、動きが鈍^{にぶ}いのよ。関節に油を差したくなるわ」

「いつからロボになったんだ、おまえは」

セイラは普段から無表情な上に、妙に動きが硬いのでロボっぽい。

ロリ・ロボ・無表情に加え、しゃべりが独特と、属性が渋滞^{じゅうたい}してる感がある。

「ところで珍しいわね。フドーが勉強してないなんて。さつきから手が止まってるわよ」

「ああ、ちょっとな……」

むろん、俺は普段から休み時間も休んでいない。

貴秀院の休み時間はたったの一〇分。

だが、試験の残り一〇分で難問を解く、といったシチュエーションを想定して訓練する

にはちょうどいい。

「ちよっと、どうしたの？ 早く聞かせなさい。ハリー、ハリー」

「グ、グイグイ来るなあ」

セイラは同じ年のはずなのに、どうも上から迫^{せま}ってくることが多い。

「ちよっとな。いつ奇襲^{きしゅう}があるかと思うとソワソワして勉強も手につかないというか」
亜月の「天国作戦^{てんごくさくせん}」とやらの発動から、何事もなく数日^たが経^たってしまった。

面倒^{めんどう}になって放置^{ほうし}してる可能性もあるが、安心するのはまだ早い。

ヤツは俺が忘れた頃^{ころ}に来る。きつと来る。

「こら、情報が増えても余計^{じよぎやう}に状況^{じきやう}が不明^{ふめい}になってるわ。もつと説明を」

「これ以上はブライバシーに関わるからダメだ。セイラが気にすることでもない」

「いいえ、私が気にすることよ。私は、君のもとに送り込まれたスパイだから」

「……………」

残念ながら、このロリはとても真顔だ。

そう、セイラは俺のスパイ——と、一年の頃から主張^{しやう}している。

セイラとは一年、二年と同じクラスで、去年の秋頃^{あきころ}から話をするようになった。

友達^{ともだち}といつていい関係——なんだが。

「……俺をスパイしても得るものは一つもないぞ？」

「この貴秀院で学年首席^{しゆし}を獲^とった生徒の情報なら、なんらかの価値はあるでしょう？」

「ひたすら時間をかけて勉強^{べんきやう}しただけだ。特別なことはなにもしてない」

亜月にも非効率的だとデイスられたほどだしな。

「なんなら、二十四時間カメラで監視^{かんし}してもらつてもいいくらいだ」

「なんだ、それをやってもいいの。フドーの部屋、二十四時間生配信^{なまはなししん}しよう」

「待て待て、冗談^{じやうだん}に決まってるだろ！」

セイラがさつそく小型PCとWEBカメラを取り出したのが恐^{おそ}ろしい。

こいつはデジタルガジェットに詳^ふしく、生配信なんか朝飯前^{あさひめ}だろう。

ガジェットに詳しいせいで、スパイ^{スパイ}って戯言^{ざご}が真実^{まじつ}味^{あじ}を帯びるのが怖^{こわ}い。

「あんな、別にたいしたこともでもない。要するに——あいつだよ」

「ああ、天詞^{あまつかい}妹^{いもうと}ね」

曖昧^{あいまい}な人称代名詞^{じんしやうだいめいし}から、察^{さつ}してくれた。

「相変わらず、あの後輩^{こうはい}とイチャイチャしてるのか。なんていやらしい」

「どこをどう見たら、俺と亜月^{あづき}がイチャついてると思うんだよ……」

「フドーは、唯一^{ゆい}の友達^{ともだち}も唯一^{ゆい}の後輩^{こうはい}もどっちも女ね。チャライわ」

「チャラい!? それくらい、俺からかけ離れた言葉も珍しいぞ!」

セイラが唯一の友人なのは確かだが、こいつは俺への評価をおおいに間違ってる。

「あの軽そうな後輩とイチヤイチヤしてると、フドーも同類に見えるわ」

「残念ながら、亜月が軽そうなのは否定できないな……」

「フドー、前から言ってるわよね。天詞妹にはあまり近づくなと」

ゴゴゴゴゴ、とセイラの周りで黒いオーラが渦巻いている。

「な、なんなんだ……俺のほうから亜月に近づいてるわけじゃないが、後輩をそう邪険に
もできないだろ」

「……………ちっ」

「舌打ち!」

「まあ、いい。今日はこのくらいで勘弁^{かんべん}してあげるわ。でもフドー、なにかあったら、すぐにこの私に報告するように」

「おまえは、俺のなんなんだ……?」

俺のツツコミはスルーして、セイラはすたすたと自分の席へ戻っていった。

なんなんだ、いきなり話しかけてきたと思ったら逃げるように去りやがったな。

「あの、風堂くん……?」



続いて俺の席にやってきたのは、天詞彩陽。

んん!? 天詞彩陽が来たあ!?

「ち、違う! セイラはただの友達だ!」

「お、お友達ですか。教室でよく話してますよね、お二人」

「……………」

いきなりの彩陽登場にテンパって、意味不明な受け答えをしてしまった。

「別に小さい子が好きってわけじゃないぞ。誤解しないでくれ」

「え、ええ、世良さんは小柄で可愛らしいですよ。大丈夫です、お好きでもおかしくありません。わたしも小さい子、大好きですよ」

「……………」

世の中は不公平で、男が「小さい子が好き」なんて言うとは逮捕されかねない。

「え、えーと、それで……すみません。実は、風堂くんにお話が」

「……………!?!」

突然、彩陽が屈み込んで、顔を寄せてきた。

ふわっと、彩陽の黒髪から甘酸っぱい香りが漂ってくる。

「も、申し訳ないんですが……今日、わたしの家に来ていただきたいんです」

「あ、ああ。別にかまわな——彩陽、じゃない、天詞の家につ!」

「しーっ、です」

彩陽は顔を赤くして、周りをきよろしてから人差し指を唇に当てる。

「だ、大事なお話なんです。ぶしつけですけど、わたしの家の住所です」

彩陽は、さっと小さな紙を差し出して、小走りに自分の席へ戻ってしまう。

俺が、彩陽の家に——?

紙を広げてみる。PCでプリントしたらしい地図に、住所が手書きで記してある。

地図を見る限り、学校から近くはないが、バスならそうかからずに行ける距離だ。

天詞彩陽の家に招待されるとは——

つまり、それだけ重大な話があるということだろうか。

まさか、ラブレターの件の続き——なんてことがあったりするのか?

うやむやにしまったが、彩陽の中ではまだ終わっていない話だったのかもしれない。

まさかまさか、彩陽がOKしてくれるなんて展開も……?

わざわざ道をつくってもらうまでもなく、天国は俺の進む先にあった!?

4 あたしの声にちよつとは気づけよ

こんなにも待ち遠しい放課後が、人生でかつてあっただろうか。

午後には雨も上がり、空も青く晴れ渡^{わた}ってきている。これは幸先がよろしい。

彩陽^{あやひ}に渡された地図には十七時と時間の指定もあった。

授業が終わってから直行では早めに着いてしまったため、学校の図書室で時間を潰^{つぶ}してからバス停へと向かった。

バスで走ること十五分ほど。

到着したのは、まるで馴染^{なじ}みのない地域だった。

静かな住宅街で、どんな悪事を働けば買えるんだという豪邸^{ごうてい}だらけだ。

「さすが天詞家……住んでるところも普通じやないな」

地図を見ながら、見慣れない道を歩く。

スマホに住所を送ってもらえば早かった気がするが、残念ながら彩陽とは連絡先^{れんらくせん}を交換^{こうかん}していない。

「ん……？　ここか？」

たどりに着いた家の前で、少し首を傾^{かた}げてしまった。

門構えは立派で、その向こうに最近では珍しい平屋の木造建築^{かぞうけんちく}がある。

立派な瓦屋根^{かわら}や、手入れの行き届いた庭も見える。

「意外とこちんまりとしてるな」

天詞家は、貴秀院^{きしゅういん}の生徒の家でも特に裕福^{ゆうふく}だと聞いている。

その大金持ちさんにしては、やや謙虚^{けんきょ}なサイズではないだろうか。

「もつと威圧^{いあつ}的な武家屋敷^{ぶけやしき}か、城みたいな洋館かと思ってた……」

一般住宅よりは立派^{いっぱん}だろうが、大邸宅^{ていたく}というほどでもない。

フィクションのようにはいかないということか。

「……………」

そこまで考えて、はたと固まってしまう。

和風住宅といっても、まさか門を叩^{たた}いて「たのもーう」ではないだろう。

もちろんチャイムは備え付けられている。これを押せばいいだけのことだ。

「これを押したら、天詞が出てくるんだよな……？」

なんだ、その夢の装置は。ボタン一つで片思いの女の子が召喚^{しょうかん}できるなんて。

またもや気持ち悪いことを考えつつ、逡巡^{しゆんじゆん}してしまう。

自宅での彩陽は私服だったり、もしかすると部屋着だったりするかもしれない。彩陽とは一年生、二年生と同じクラスだが、制服の他には体育のジャージや体操着姿しか見たことがない。

まさか、そのどちらでもない服装を見る機会がやってくるとは……！

「ええい、ままよ……！」

人生で初めて使う台詞を口走りながら、俺はチャイムを押した。

『……ハイ』

「あの……同じクラスの風堂です」

聞き間違えるはずもない、彩陽の声だった。インターホン越しでもはっきりわかる。

「わざわざありがとうございます、風堂くん。ただ、大変失礼なのですが、今ちょっと手が離せなくて。鍵は開けてありますので、そのまま上がってもらえますか？」

「え？ いいのか？」

「はい、玄関にスリッパがあるのでお使いください。玄関から廊下をまっすぐ進んで突き当たりを右、一つ目の部屋に来てもらえますか。そのまま入ってきてかまいませんから」

「あ、ああ、わかった。それじゃ」

『お待ちしています』

ブツン、とインターホンが切れた。

そわそわしつつ、手早く服装を整え、見苦しく汗などかいていないか確かめる。

「……よし」

召喚できなかったのは残念だが、少し手間が増えるだけだ。

門から玄関へ進み、「失礼します」と断つてから、最近では珍しい引戸を開けて家の中へ入る。

おお、ここが彩陽の家——なんだかさわやかな香りがするような。

「えーと、スリッパと廊下をまっすぐと一つ目の部屋だったな——」

指示されたとおりに進み、一つ目の部屋を見つける。

ここが居間なんだろうか。そのまま入ってきていいって言ってたが……。

「天詞、入るぞ？」

一応、声をかけてからふすまをすつと引く。

「……え？」

「……………」

確かに、室内には彩陽の姿があった。

だが、俺の予想に反して居間ではなかったようだ。

畳敷きの和室。部屋の奥に、艶のある美しい文机。古風な鏡台やタンス。まるで時代劇で見かけるような部屋だ。

「風堂くん……？ ど、どうしてわたしのお部屋に……？」

「あ、天詞の部屋……？」

タンスの前に立っていた彩陽と目を合わせ、俺も彼女も顔の周りに？マークを乱舞させてしまう。

いや、そんなことは——どうでもいい！

そんなことより、なによりも！

「あ……！」

彩陽は、両腕で胸を隠すようなポーズになった。

制服の白いブラウスの前をはだけ、レースで縁取られた高級そうなブラジャーがあらわになっている。

毎日のように制服越しには見てきて、そりゃ俺も健全な男子なので拝みたいとは思っていたが……まさかこんなところで！

「お、お客様の前でこんなはしたない格好を！ ごめんなさい！」

「そういう問題か!？」



半裸を見られて恥ずかしいんじゃない?!

「す、すまん!」

「風堂くん、待ってください!」

「え?」

部屋を出るという選択肢に気づいた俺が身を翻したとたん、呼び止められた。

「な、なんだ? どうかしたのか?」

「せっかくだらしてくれたんですから、まずご挨拶を……」

「それ、今一番やらなくていいヤツ!」

振り向きたい欲望と必死で戦ってるんだから、余計なことを言わないでくれ!

「と、とにかく悪かった! またあとで!」

なんと言われようと、これ以上彩陽の部屋に居座るのはまずすぎる。

天然にもほがある……が、なにか引つかかるな?

彩陽の下着姿のせいで頭が回ってくれない。

というか、廊下に出たのはいいものの、どうすればいいんだ?

「もう……風堂くんのえっち♡」

「い、いや、違うって、天詞……!」

「いええーいつ!!」

「ぐおおっ!」

振り向いたとたん、なにかが正面から襲いかかってきた。

ぷるん、たゆんと柔らかいなにかが顔に押しつけられて——俺は慌てて、それを引き剥がす。

「……亜月!」

「お姉ちゃんと思った? 残念、亜月ちゃんでした!」

「……亜月の存在を完全に忘れてた」

「ひっど!」

亜月が、ただでさえ大きな目をさらに見開いて驚いている。

肩が剥き出しなキャミソールに、太もももあらわなショートパンツという格好だ。

「こんなに可愛くて騒がしくてウザい後輩の存在を忘れるって、相当ですよ! っただけ舞い上がってたんですか、先輩!」

「自慢なのか自虐なのかわからんな。い、いや、そうだな……いるに決まってるよな」

「あたしん家ですからね。いやー、先輩がウチの廊下にいるっていうのがなんかすごく変。っーか、廊下でウロウロしないでくださいよ」

「あ、ああ。悪い……って、今日は亜月のお姉さんに呼ばれてきたんだよ……いや、ちょっと待て、やっとわかった。おかしくないか？　なんで天詞は自分が着替えをしてる部屋に來いなんて言ったんだ？」

彩陽が半裸を見られたことより、下着姿が見苦しいと思っているのはともかく。着替え中に俺を自室へ誘導する意味がわからん。

「そりゃ簡単ですよ。さっきのインターホン、あたしですもん」

「はあ!？」

「どうです、似てたでしょ？　『わざわざありがとうございます、風堂くん。ただ、大変失礼なのですが、今ちょっと手が離せなくて』……ってねwww」

「なっ………!」

気味が悪いくらい似てた。亜月の背後に彩陽が隠れてるんじゃないか？

俺にえっち、って言ったのも亜月だよな。彩陽らしからぬ言い回しだ。

「地声はけっこう違うんですけどね。あたしは、なにせ無駄に器用なんで」

「なんだ、その無駄な芸達者っぷりは……」

俺の筆跡を見事に真似たことといい、亜月は悪事にしか使えなさそうな技術に長けすぎている。

「つーか、見事に騙せてちよつと複雑……あたしの声にちよつとは気づけよ」

「おまえのワガママは底無しか。騙された上に、鈍さを罵られんのかよ……って、待て」
インターホンの声が亜月だったってことは——あらためて考えるまでもなく。

「おまえが、天詞の部屋に誘導したのかよ!」

「まさか着替え中とは。姉、さっき帰ってきたばかりなんですけど、先輩をお迎えする前に着替えてたんですね。先輩が、いきなりお姉ちゃんと部屋で鉢合わせたら面白いかと思つたのに、面白くなりすぎましたわー」

「ましたわー、じゃねえよ！　なんてものを見せるんだ!？」

「ご、ごめんなさい……なんでもものを見せてしまつたんでしよう、わたし……」

「うおっ!？」

背後に、いつの間にか彩陽が現れていた。

涼しげなノースリーブのブラウスに、足首まであるロングのブリーツスカート。
期待したとおりの私服姿、それも予想以上の清楚さ、可憐さだ。

そんな彩陽と同じ空間にいるというのが信じられない。

「い、いや、天詞。おまえはなにも悪くない……つーか、お互いに忘れよう」

「え、ええ。風堂くんがそうおっしゃるなら……」

「えー、先輩が忘れるわけじゃないじゃん。むしろ、脳内で全裸に加工済みじゃないかな」
 せっかく、当人同士が穏やかに解決しようとしているのに、いらんことを言う奴が一人。
 あと、俺の脳に写真編集アプリはインストールされてねえよ。」

「亜月、ありがとう。天詞がいるし、もう大丈夫だ」
 なにが大丈夫か自分でもわからないが、とりあえず彩陽と二人になりたい。

「あ、いえ。その……どちらかというと、亜月ちゃんの件といえますか」

「亜月の件……？」

「事前にお話しできなくてすみません。亜月ちゃんが、できればお家にご招待してからお話ししてほしいとお願ひしてきたものですから……」

「……………っ」

「さっ」

俺が亜月を睨むと、自称可愛い後輩は素早く目を逸らした。

こいつ、俺がわくわくドキドキ期待しながら天詞家に来るのがわかって、姉にそんな頼み事をしやがったな……。

「亜月ちゃんのお話ではあるんですが……わたしからもお願ひしたいんです。どうか、わたしのお願ひを聞いていただけたら……」

「……………」

天使のお願ひを聞かない理由があるだろうか、いやない。

まだもう少し期待してもいいだろうか……ああ、胸がときめく。

「実は、亜月ちゃんの家庭教師をお願いしたいんです」

「……………」

胸のときめき、これにて終了。

俺が通されたのは、天詞家の応接間だった。

応接間も畳敷きの和室で、立派な座卓が置かれている。

「家庭教師って、なんでまた……」

「理玖先輩、実は……」

と、彩陽の横で正座している亜月が珍しく神妙な顔で言った。

「実は、この亜月ちゃんは馬鹿なのです」

「だろーな」

「だろーな!? この先輩、自分はちよっと学年トップだからって！」

「あ、あの、落ち着いて亜月ちゃん。えーとですね、妹は残念ながら成績がよくないんです。先日の中間テストの結果もあまり芳しくなくて」

なるほど、そういえば亜月の成績は気にしたこともなかった。外見だけで判断するなら頭悪そうだが、見たまんまなのか。

「それで、家庭教師をつけてみようかと。本人からお願ひするのが筋なのですが、亜月ちゃんに頼まれたんです。風堂くんと同じクラスのわたしから話を通してほしいと」

「天詞の妹は、人を通さないと頼み事ができない気弱さんでないだろ？」

「心外な。あたしごとき後輩が先輩に直接お願ひ事をするなんて恐れ多いからお姉ちゃんに頼んだんですよ」

「邪悪な笑みを消してから言え、そういう殊勝な台詞は」

間違ひなく、亜月は俺が彩陽からの呼び出しに淡い期待を抱くことを想定していたはず。その上で、「残念、亜月ちゃんでした！」をやらかす。そして俺、傷つく。

「亜月ちゃんが学校でこのお話するのは恥ずかしいということで、ウチに来ていただきたいんです」

「なるほど……って、ちょっと待て！」

俺が亜月に手招きすると、奴が膝でちょこちょこ歩いてきた。

「おい、まさかこれが『レベル上げ』とか言わないだろうな？」

亜月と顔を寄せ合って、彩陽に聞こえないように小声で訊く。

「先輩、学校で姉と接してもなにも変わらないです。自宅という非日常的なシチュエーションで姉と話して、経験値を稼ぐんです」

「おまえ、そんなことのために家庭教師とか……！」

「……普通にやってたら、先輩が天詞家を訪ねるなんて十年かかって無理ですよ？」

「……………」

残念ながら否定はできない。十年かかるというのも大げさじゃない。

天詞家でなくとも、女子の家を訪ねるだけで俺にはハードルが高すぎる。

「そういうわけで、お家訪問で普段と違う君にドッキドキ ミッション、開始です！」

「おまえ、マジで面白がつてんだろ……」

亜月を楽しませるだけの亜月ちゃんルートに既に入ってるんじゃないのか？

「あのー、亜月ちゃん、風堂くん？ なんのお話を……？」

「あ、ああ、すまない。なんでもないんだ」

くそ、亜月の思惑はともかく、来てしまった以上は今さら引き返せない。

やはり、俺が油断した頃に『天国作戦』が始まりやがった……！

「それより、家庭教師の話をもう少し詳しく頼めるか？」

「そうでした。すみません。妹はまだ入学したばかりですが、前回の中間テストの成績にだいぶ問題があったので……早めに手を打っておこうかと」

「ふむ……つまり、亜月は裏口入学だったのか？」

「なんでそうなるんですかつ、先輩！」

「いや、ちょっと疑わしいとは思ってたんだよな。貴秀院の入試はかなりキツいだろう。なんで亜月が受かったのかと」

「い、いえ、亜月ちゃんはちゃんと入学試験に合格しています。天詞家は不正のたぐいはいたしません」

「天詞がそう言うなら間違いないか……」

「あたしと姉の信頼度の差がエグい」

亜月が、ぶつぶつ文句を言っているが、普段の行いに問題があるのが悪い。

「まぐれで貴秀院に受かったってことだな……」

俺は、思わず腕組みして考え込んでしまう。

「身の丈に合わない成果が出ちまうと、キツいよな……」

なにしろ、同じ経験をした人間をよく知っているわけだからな……。

「また身も蓋もない言われようですけど……先輩？」

「あ、ああ。なんでもない」

俺の過去の苦労など、人様に話すことでもない。

「要するに、亜月の今後の学業に大いに不安があるから家庭教師が必要ってことだな」

「言い方は引っかけますが、そういうことですよ先輩」

亜月にはやりと笑うと、畳の上に手をついた。

「家庭教師、お願いします、理玖先輩。授業料はあたしのボディで♡」

「当方は現金払いしか受け付けてない」

「秒で否定された！先輩、ノリが悪い！もっと乗っかってくださいよ！」

そうは言われても、なにしろ彩陽の前なのだ。迂闊に悪ノリできねえ。

「だが、なんで俺なんだ？天詞家なら高学歴で実績もある家庭教師を雇えるだろう？」

俺を家に呼び込む口実としては、ちよつと苦しくないか？

「もちろん検討はしたのですが、亜月ちゃんが候補者のみなさんにダメ出しを……」

「おまえ、何様なんだ？」

「偉そうな先輩には言われたくないですねえ。でも、男の家庭教師だと亜月ちゃん可愛いから気が散るでしょうし、女の先生でも亜月ちゃんの可愛さに嫉妬しちゃうでしょ？」

「亜月、家庭教師じゃなくて医者が必要なんじゃないか……?」

「人の自宅だろうと、一ミリも容赦しないのが先輩らしくていいですよ」

「それはどうも」

俺に白羽の矢が立ったのは、作戦のための口実ってだけじゃないのか。

亜月に家庭教師が必要なのはマジで、普通に派遣されてくる家庭教師が嫌だつていうのも事実なのかも?

「だったら、天詞が教えるのはどうなんだ? 一年の頃から学年トップを独占してきた秀才じゃないか」

「独占だなんてそんな……この前の中間テストは風堂くんに完敗しましたし」

彩陽は、恥ずかしそうに笑っている。

心から完敗だと思っている顔だった。

本校舎の一階廊下に貼り出されたテスト結果には点数も表示されている。

一位の俺と二位の彩陽の点差は、わずか3点にすぎなかった。

些細なケアレスミス一つで簡単にひっくり返る点差でしかない。

少なくとも、俺は完勝だったとは思っていない。勝ち負けは勝ちだが。

「それに、姉のわたしですとどうしても甘やかしてしまうので」

「ああ、天詞が甘やかしたから、亜月はこんなになったのか」

「こんなん?! さつきから毒舌が止まりませんね、先輩! あんなにもあたしを可愛がってくれた先輩はどこへ行ったの!?!」

「どんなにもだよ!! そんな先輩、いねえよ!」

「まあまあ、先輩。ちよつとちよつと」

「ん?」

亜月が顔を寄せてきて、耳のそばでささやいてくる。

「あたしの家庭教師になれば、定期的にウチに来てお姉ちゃんと接触できて、経験値どつさりでボロ儲けですよ」

「なにがボロ儲けだ。おまえのいたずらで破壊するピンチも増えそうなんだが」

さつきの着替えにバツタリ事件、下手したら通報ものだぞ。

亜月ちゃんルートですらなく、逮捕からのバッドエンドルートじゃねえか。

「そりゃあ、悪魔も手ぐすね引いて待ってますから。ですが、ピンチもチャンスもなにもないよりはマシじゃないですか?」

「……まさに悪魔のささやきだな」

そのとおりではある。俺と彩陽の接点は同じクラスというだけ。

彼女との距離^{きより}を詰めるための計画は、未だに白紙のままだ。

「あの、風堂くん、亜月ちゃん？ さつきから何度もなにを……？」

「ああ、悪い。ちょっと、本人の口から具体的な成績なんかをな」

堂々と嘘をつく俺。『天国作戦』は、彩陽にだけは知られてはならない。

「そうなんですか……あ、風堂くん。もちろんバイト代もお支払いします。こちらで相場を調べてみたのですが、——くらいでいかがでしょうか？」

きちんとお金の話ができるのは素晴らしいことである。さすが彩陽だ。

妥当^{たとう}と思える金額の二倍くらいだが……彩陽もそれだけ困難な仕事になると踏^ふんでるんだろう。

「わかった、引き受ける」

「んん？ 先輩、今なんて？」

「亜月の家庭教師を引き受けると言ったんだ。金銭の問題もクリアされてるしな。そうだな、ウチの学校で馬鹿はまずい。貴秀院じゃ、秀才にあらずんば人にあらずだからな」

「そ、そこまで貴秀院もラディカルではないのでは」

「いいや、そこまで過激だ。ま、それくらいの気構えて勉強したほうがいいだろう」

彩陽は俺に抜^ぬかれるまで学年首位をひた走ってきたから気づいていないだけだ。

進学校では成績がなにより重視される。

成績が悪ければ、人間として下に見られることすら当たり前なのだ。

俺は、そのことを痛いほどよく知っている——

「ふーん、意外とあっさり引き受けてくれましたねー」

亜月は感心したフリをしているが、俺が彩陽との接触のチャンス逃^にがさないことくらいは予想していただろう。だが——

「亜月、家庭教師をやるなら本気でやるぞ。いつもみたいに甘やかさないぞ」

「甘やかす!? 先輩、普段からものつすごいスパルタでしょ！ その台詞は仏の亜月ちゃんでもちょっと怒りますよ！」

「勉強に関しては手抜^{てぬ}きしないってことだ」

「……うわ、またかっこいいことを」

亜月は感心しているが、当然のことだ。

俺が天詞彩陽に勝てるものがあるとすれば、ただ一つだけ。

その勉強だけは、たとえ教える側であろうと手は抜けない。それだけのことだ。

5 女の子って、ちょいぐく馬鹿なくらいが可愛いですよ♡

そして、翌日の放課後――

昨日から家庭教師を始めてもよかったのだが、準備も必要ということで、時間をもらったのだ。

垂月に言ったとおり、手抜きをするつもりはない。一切ない。

「それでは風堂くん。今日から、ウチの妹をよろしくお願いします」

「ああ、任せてくれ。準備はぬかりない」

天詞家玄閔で俺を出迎えてくれた彩陽は、今日も私服姿だ。

半袖の白いワンピース姿で、いかにも清楚なお嬢様という雰囲気だ。

今日はさすがに着替えには遭遇してない。狡猾なるあいつは同じ手口は使わない。

この際、使ってくれてもいいんだが――つと、いかん。

告る前に下着姿を見るとか、順番を間違えすぎだ。

彩陽に案内されて、今日は居間らしき部屋へと通された。

居間も和室で、TVや棚、座卓やソファが置かれていて、応接間より生活感がある。

彩陽の生活の一部を垣間見て、こんなことでもドキドキしてしまう。

その彩陽はお茶を淹れますと言って、居間を出ていった。

ふすまの開け閉め一つとってもお行儀がよく、さすがのお嬢様っぷりだ。

ああ、いちいち彩陽の一挙手一投足に動揺していて俺の心臓はもつのか？

いや、気を引き締めろ。せつかく彩陽の家に来られる機会を無駄にはできない――

「あ、せんぱーい。お姉ちゃん目当てでいらつしやいましたねー」

「声がでけえ！」

ふわふわーとした足取りで入ってきた後輩が、いきなりとんでもないことを口走ったので、がしつと頭を押さえる。

「ちよつと先輩！ 女の子の頭を撫んじやダメですよ！ 髪型が崩れます！」

「俺の計画が崩れそうなんだよ！」

「いけませんね、既にあたしの作戦があるのに別計画を同時進行させると、崩壊の元ですよ。どうせ、お姉ちゃんの連絡先を聞き出そうとか、みみっちいモンでしょ？」

「……別に、毎日教室で会えるんだから連絡先なんて知らなくてもいいだろ」

「今、間がありましたね。せんぱあい、頼みますよ。作戦にもない程度のどうでもいいことですよ。連絡先くらい普通に聞き出してください」

「俺はそんな陽キャじゃないんでな……」

「先輩は学年トップですよ。貴秀院じゃ、既に上位種族入りしてますよ。ゴ布林で言えばホブゴ布林ですよ！」

「ゴ布林で言うな！」

俺もファンタジー小説を読んだことくらいはある。

せめて、ハイエルフとか言いようがあるだろ。

「最近のラノベじゃゴ布林が熱いんですよ。あたしは流行りのボンコツエルフですね」

「そんなもん流行ってるのか……まあいいから、そろそろ座れ」

亜月は今日はまだ制服のままで。帰ってきたばかりなのだろう。

髪を二つ結びにしている。学校ではあまり見かけない髪型だ。

いつもより幼く見える髪型は、自宅でくつろぐには楽なのかもしれない。

「はいはい、座りますよ。でも、ここでいいんですか？」

亜月は、座卓に教科書だのノートだのを並べつつ言った。

「なんだ、他の部屋のほうがいいのか？」

「いえ、亜月ちゃんのお部屋に興味津々だったりしません？」

「俺、汚部屋は好きじゃなくてな……」

「あたしも好きじゃないですよ！　というか、汚部屋じゃないですよ、失敬な！」

「なぜ汚部屋じゃないんだ？」

「それ、既定路線なんですか？　言っときますが、あたしの部屋は常に整理整頓が行き届

いて、チリ一つ落ちてませんよ」

「ああ、使用人がいるのか？」

「はい」

「……じゃあ、おまえが綺麗好きなわけじゃねえだろ。というか、俺も挨拶したほうがいいか？」

「この家には一人だけなんですけど、今日はいません。だいたい、ウチの使用人はお客さんの前には姿を見せないですね。忍んでます」

「使用人がそれでいいのか……？」

客に対応するのも使用人の仕事ではないだろうか？

「……待て。この家には一人だけ？　妙な言い回しだな」

「ここって別宅なんですよ。この家で生活してるのは、あたしとお姉ちゃんと、その使用人だけ」

「は？　まさか、その……」

「あー、あはは。複雑な家庭環境とかはないですよ。天詞では子供は親の手元で育てないんです。父も母も多忙ですからね。ウチら姉妹は祖父母に育てられてたんですが、数年前に二人ともコロッと他界しまして。そのあとは、使用人と三人で暮らしてます」

「あつからんと話しすぎじゃないか……？」

「ここ、こちんまりとしてるでしょ？ 姉妹が暮らすだけなら充分な広さですから」

「……ああ、なるほどな」

あの天詞家にしては、そこまで大邸宅というほどでもない理由がわかった。

「ウチの両親はタワマン暮らしですよ。現代のお金持ちはもう漫画みたいな大豪邸には住まないんです」

「まあ、マンシヨンのほうが設備は揃ってるし、セキュリティもしっかりしてるだろうしな……って、おい。三人だけで防犯面は大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよ、ウチの両親お向かい、このあたり一帯はほとんど天詞の関係者ですから。ご近所が総出であたしん家を見張ってくれてるようなもんです」

「そりゃ頼もしい……って、そこに俺みたいのが出入りしていいのか？」

「……まづいかも」

「おおいっ、天然は天詞だけで充分なんだが!？」

天詞一族に命を狙われようものなら、俺みたいな一般庶民はひとたまりもない。

「冗談ですってば。むしろ、先輩は『本家の馬鹿次女の面倒を見る人間が現れるとは』って敬意を持たれてるでしょう」

「待て、亜月の馬鹿は一族郎党に知れ渡ってるレベルなのか？」

「女の子って、ちょこっと馬鹿なくらいが可愛いですよね♡」

「そんなことを自分でたまう奴は、あまり可愛くねえ……」

どうやら、俺は危険すぎる仕事を請け負ってしまったらしい。

「すみません、風堂くん、お待たせしました。どのお茶を淹れるか迷ってしまつて」

「……よし、始めよう」

彩陽が湯飲みや急須を載せた盆を持って現れ、俺は気を取り直す。

自分の勉強とは勝手が違うだろうが、俺が底辺から成績トップまで昇った経験は活用できるはず。

家庭教師は報酬が発生する仕事だ。

とりあえず、作戦とか忘れて徹底的に亜月に教え込んでやろう……!!

授業時間は四十五分。

最初にそう決めていた。亜月はどうせ勉強慣れないだろう。

無駄に長時間続けても、集中力がもたない。

短時間でも密度の濃い授業をするほうが効率がいいはずだ。

「……よし、休憩にしよう」

「ふえーっ……!! 死ぬかと思いましたよ、先輩……」

「勉強のしすぎで死んだ奴はいねえよ」

おそらくいるだろうが、いないことにしておく。

「めっちゃ準備万端でしたね、先輩……たった一日でオリジナルの問題集までつくってきちゃうとか……暇なんですか?」

「おまえ、ドツくぞ」

昨日、徹夜で一年生の教科書や参考書、ノートをひっくり返して亜月専用の問題集をつくったのだ。

亜月の学力は本気で知らないが、貴秀院の底辺レベルなら想像がつく。

かつての俺がそうだったのだから。

「亜月、十分休憩して、また四十五分勉強だ。今のうちによく休んでおけ」

「言われなくても、休む以外のことはしませんよ! 見くびらないでください!」

「見くびっちゃいないが……まあ、好きにしろ。またすぐに地獄だ」

「地獄って言わないでくださいよ! この鬼教官! 鬼畜男子!」

「まだ元気ありそうだな。インターバル十分は長すぎたか?」

「休みます!」

亜月はゴロゴロと畳の上を転がり、ソファまで移動してそこに寝転がった。

ミニスカートでそんなダイナミックなアクションをするなよ。

「お疲れ様でした、風堂くん」

「ああ、まだ前半が終わっただけだな」

実は、彩陽も四十五分の間、同じ座卓についていた。

彼女も教科書とノートを広げて勉強していたようだ。

「だが、わざわざ天詞も付き合わなくてよかったんだぞ?」

心にもないことを真顔で言う俺。

「い、一応……妹と殿方を二人きりにはできないといえますか……いえっ、本当に風堂くんを疑ってるわけではないんです! ただ、天詞はそういう家なので……」

「なんだ、そんなことか。いや、当然のことだろ」

疑われても全然OKだ。俺が亜月を相手に理性を失うはずもないし。彩陽が同席してくれるのだから、むしろありがたいだ。

「本当にごめんなさい。こちらから家庭教師をお願いしておいて、失礼なことを……お詫びとってはなんですが、わたしにもできることがあれば、なんでもしますので!」

「な、なんでも?」

「食いついた、食いついた……浅ましいですよ、先輩w」

ソファに寝転がっている物体がなにか言っているが、気にしない。

「いや……高いバイト代をもらうんだから、他になにもいらない」

「そりゃ、いらなんでしょうね。先輩にはバイト代だつてついでなんだし」

「え? 亜月ちゃん、それはどういう……?」

「妹さんは勉強疲れで錯乱してようだ。しばらく放っておこう」

「ハイハイ、亜月ちゃんは放っておかれますよ。ちよつと、お部屋に戻ってきます」

「ちゃんと十分で戻ってこいよ」

ナイスだ、亜月。素晴らしい。天国作戦は、続行中らしいな。

これでめでたく、彩陽と二人きりだ。

といっても、いったいなにを話したものか……ヤバい、沈黙はヤバい。

「……変な感じですね」

「え? な、なにがだ?」

「同じクラスの男の子が、わたしの家にいるのが……いえ、変つていう言い方はよくありませんね! ちよつと慣れないといえますか……」

「……俺も戸惑つてないって言ったら嘘になるな。天詞とは、これまでろくに話したことなかったわけだし」

「風堂くんが、亜月ちゃんと仲良くしてくれていることは知っていました。ですから、実は前からきちんとお話ししてみたかったです」

「……………」

くそつ、くそつ、くそつ!

それならもつと早く言ってくれよ!

「それに——わたしだって、人間なんですよ?」

「……は?」

「お友達に言われたんです。この前の中間テストの結果が貼り出されたあと——さすが、一回トップから落ちたくらいじゃ動じないよね、と」

そのとおりじゃないか?

なにしろ、教室では隙あらば彩陽の顔を盗み見ている俺だ。

俺が学年首席を獲ったあとも、彼女の様子に変化は見当たらなかった。

「そんなことないんです。わたしだって人間です。学年トップを獲れば嬉しいですし、二位に落ちれば……悔しいんですよ？」

「く、悔しい？ 天詞が？」

「当然ですよ。だから、わたしに勝った人のことは気になってましたよ」

彩陽は、ぷくつと頬をふくらませて俺を睨んでくる。

天使の笑顔の裏にも、人間の感情が潜んでた——

彩陽が優しいことと、腹が立つことの二つあることは矛盾しない。

というか、ふくれっ面の彩陽が可愛すぎて気を失いそうだ。

「そうだな、俺だって人間だ。正直なことを言おう。天詞に勝てて——嬉しかった」

「む……」

天使様はますます頬をふくらませた。

「風堂くん、次のテストはわたしに勝ちますからね」

「悪いが、俺もトップを譲る気はない。家庭教師の仕事くらいは障害にもならないから、ハンデを背負わせたなんて思わなくていいぞ」

「……風堂くん、意外と意地悪なんですね」

たぶんだが、彩陽はこんな風に人と張り合ったことはないんじゃないだろうか。

「正直に言ったのは、俺はトップを獲ったことを誇りに思ってるからだ」

「二位以下のわたしへの気遣いですか？」

「それもあるが、俺は自分の努力と結果を否定しない。学園祭で背中を押してくれた恩人のためにもな」

「学園祭……？ 恩人……ですか？」

ふむ、ちよいとカマをかけてみたが、反応は無し……か。

やはり忘れていたのか、あるいは彼女にとっては特に意識するような出来事でもなかったのか。

「ま、俺は凡人だからな。生きてるのが不思議なくらい頑張って、やっと獲った首席だ。

喜ぶのも譲りたくないのも当たり前だろ」

「風堂くんが凡人だとは思いませんよ。ですが、わたしもあなたの努力に負けないだけのことしますから。次は勝ちます」

じつ、と彩陽が見つめてくる。

まさか、あの憧れの天詞彩陽にライバル認定してもらえろとは。

若干、俺が望む方向から逸れて^そいるが、ただのクラスメイトAよりはよっぽどいい。こんな展開、亜月の家庭教師がなければありえなかった。

もしかして俺、順調にレベル上がってるのか……？

「あ、いえ、ごめんなさい。さつきから生意気なことばかり」

「いや……あの天詞彩陽も人間だってわかって、ちよつとほつとしたよ」

「なんですか、ほつとしたって」

彩陽は、くすくす笑ってる。

^{ちようせん}挑戦的な目つきも新鮮^{しんせん}でよかったが、やつぱり笑ってる彩陽が可愛いな。

「あ、そうです。生意気なついでに一ついいですか？」

「なんだ？」

「わたしも亜月ちゃんも、天詞^{てんし}ですから。まぎらわしいので、名前で呼んでいただけないでしょうか？」

「なっ、名前で!？」

心の中ではそう呼んでいるところか、呼び捨てだ。カレシ面してんのかって話だ。

亜月やセイラはともかく、この天詞彩陽を名前で？

嫉妬^{じと}に狂った彩陽ファンに殺されないか？

「あ、わたしの下の名前は、彩陽^{さいよう}です。華^{はな}やかすぎて恥^はずかしいんですけど」

「微塵^{かじん}も名前負けてねえだろ」

「え？」

「あ、いや……そ、そうだな」

つーか、わざわざ下の名前を教えるところが奥ゆかしい。

この有名人の下の名前を知らない奴^{やつ}は、貴秀院に一人もいないだろ。

「じゃあ、その……彩陽……さん？」

「……さんはいりませんよ。貴秀院は、男女ともに呼び捨てが多いじゃないですか。わたしは呼び捨ては苦手ですが、風堂くんは気にしなくていいですよ」

「そ、そうか。じゃあ、彩陽……」

「はい、風堂くん」

マジか……天詞彩陽をおおっぴらに下の名前で呼び捨てにできる日が来るとは！

彩陽のファンに殺される？ 知ったことか、殺したければ殺せ！

いや、殺されるつもりはないが、他人など知ったことか！

あああ、家庭教師引き受けてよかったあああ！

もう俺、告白できるところまでレベル上げできたのでは!?

「はー、パイのMEが美味しいー」

すらりと居間のふすまが開いて、後輩登場。

「理玖先輩に*（りくせんぱい）*いじめられて消耗した身体に糖分が染み渡るー」

「……まだ十分経ってないぞ」

せつかく人が感動していたのに。

亜月は、ニヤニヤしながらパイ生地のお菓子をおくおく食べている。

どうやら、悪魔のサービスタ임は終わったようだ。

再び四十五分経過。

若干、授業が厳しくなったのは、彩陽との楽しいおしゃべりを邪魔された腹いせではない。断じて。

「はああああああ、終わったあ……亜月ちゃん、もはやこれまで」

どさり、と亜月がソファに倒れ込むようにして座る。

「風堂くんの授業、わたしも聞かせていただきましたが、とてもわかりやすかったです。わたしも教わりたくらいです」

「いや、俺も人に教えるのは初めてだからな。次はもうちょつと上手くやりたいところだ。彩陽に教えられるレベルじゃないが」

「彩陽、ねえ……まったく、人が目を離れた隙にイチャコライチャコラと」

「……………」

まだ独り言のボリュームが大きいぞ、後輩。

イチャコラできていたら、どんなに嬉しいか。

「ふふ、風堂くんがどうやって勉強してるのか盗むチャンスですよ」

「おいおい、付き添ってる目的はスパイなのか？」

スパイなら、既に間に合ってるんだが。

「首席奪還のためなら、手段は選びませんよ。方法にこだわって勝てる相手ではないですからね、風堂くんは」

「ずいぶん高く評価してもらえて光栄だな。そういうば、彩陽の——」

「ちらっ♡」

「……………っ!？」

視界の端で亜月が動いたのが見えた。

「……………♡♡」

悪魔が、ニヤニヤとソファの上で笑っている。

ソファにだらしなく座ったまま、なにを思ったのかギリギリ丈のミニスカートをべろりとめくっていた。

可愛さとエロさが同居する、薄いピンクのパンツ。小さなリボンがあしらわれている。前は黒いブラジャーを見てしまったが、パンツは可愛い色を好むのか。

疑問は尽きないが、最大の謎は後輩がなぜ唐突にパンツを見せつけているのかだ。

「風堂くん、なにか言い掛けましたよね？　どうかされたのですか？」

「い、いや……」

辛いというべきか、彩陽はソファに背を向ける位置に座っているので、妹のご乱行に気づいていないようだ。

それをいいことに、亜月はスカートを戻してはまためくり、ぴらぴらと何度もピンクの下着を見せつけてきている。

なにを考えてるんだ、こいつは——！

全力でツツコミを入れたいが、彩陽に気づかれるのはまずい。まずすぎる。

亜月が自分から見せているといっても、妹の下着を見た男に好感を持つだろうか？　いや、持つまい。

亜月はニヤニヤ笑いをしつつも、頬を赤らめている。

くつ、あの後輩！　自分が恥ずかしいのめいとわずに、俺の邪魔をするつもりだ！

「……？　風堂くん、顔が赤いですよ？　もしかして熱があるのでは……？」

「だ、大丈夫だ。ちよっと暑いのかもな」

そんなわけがない。天詞家の居間はエアコンが効いていて快適な室温に保たれている。

「あ、失礼しました。もうちよっと設定温度を下げてみますね」

彩陽は疑う様子もなく、エアコンのリモコンを手にとって調整し始めた。

その彩陽の後ろでは、悪魔がお腹を押さえて声を上げずに肩を震わせて笑っている。

あいつ、マジであとで覚えてろよ。

「そ、それじゃ、そろそろ俺はお暇する！」

「え？　夕食もご用意しようかと……」

「あくまで俺は家庭教師だからな、そこまでしてもらっちゃ悪い。うん、いくらクラスメイトとはいえ、仕事なんだからケジメは必要だ」

「そ、そういうものですか」

「もしかして食材を用意してたか？　すまん、最初に言っておくべきだったな」

「いえ、そこは大丈夫ですけど……あ、そうです、すっかり忘れていました」

彩陽はそう言うのと、スマホを取り出した。

「今さらですけど、連絡先を交換しませんか？」

「そ、そうだな。お互いに急に予定が変わることもあるかもしれないしな」

「うおー、さっそく食いついた。チャンスを無駄にしない男、風堂理玖」

「……………」

ようやくスカートを元に戻した後輩が、まだしつこく外野から突っ込んでくる。軽やかにスルーしよう。

「じゃあ、LINEのIDと念のために電話番号も——」

俺がスマホを彩陽のほうへ向けたとたんに、メッセージが着信した。

反射的にLINEアイコンをタッチして、画面を表示させてしまう。

「え、亜月？　なんでLINEなんか……って、おいっ!？」

「あつ……ご、ごめんなさい！　覗き見るつもりは……!？」

立て続けにメッセージが届き、彩陽にも見えてしまったらしい。

《ごめん、先輩。お姉ちゃんに聞かせられないからこつちで》

《ひよっとして、さつきからパンツ見えちゃってました?》

《ついでに、いつもみたいに今日のパンツ送っておきますね♡》

だだだだーっ、と表示されたメッセージ——

さらに最後に送信されてきた写真は——スカートの中を写したものだっただ。

ついさつき見たばかりのピンク色のパンツが写っている。

「の、覗いてしまっでごめんなさい！　風堂くんは夕食はいらないとウチの者に伝えてきますね!？」

彩陽からはスマホ画面は逆さだったが、メッセージも写真もさつきり見えたらしい。

「それと、亜月ちゃん！　あとでお話がありますからね!？」

「ふぁーい」

亜月は、どうでもよさそうにソファに寝転んだまま手を振って答える。

それから、彩陽は小走りに居間を出ていってしまふ。

「よし、おまえをドツク」

「お姉ちゃんがいなくなったとたん、DVですか！　大丈夫です、あたしはいくらぶたれてもあとで優しくしてくれたら、すぐに許しちゃうチョロい女ですよ!？」

「おまえ、マジでシバき回すぞ……」

せつかく、下の名前で呼べるようになって順調に経験値も稼いだのに！　今のパンツ騒ぎだけでマイナスじゃねえか！　レベル下げてどうする！

天国作戦、早くも戦略的撤退を検討すべきかもしれない。

天詞家を出ると、外はもう真っ暗だった。初夏とはいえ、夜になると暑さが緩んで風は涼しい。

「まったくもうっ、油断も隙もない。先輩ってば、なにをどさくさにまぎれて姉と連絡先を交換しようとしてるんですか」

「……おまえ、なんでついてきてんの？」

後ろを振り向くと、そこには制服姿の亜月。

素足にサンダル履きになっていることを除けば、学校での姿と変わらない。

「バス停までご一緒しますよ。尊敬する先輩をお送りするのは後輩の義務でしょ？」

「もう暗いんだから帰れ。結局、おまえを家まで送らせる作戦か？」

「今日は作戦は打ち止めです。でも、今日はお姉ちゃんをまさかの名前呼びできた上に、亜月ちゃんのエロ下着まで見られたんだから、まさに天国でしたねw」

「写真をスマホに送ってこなければな！」

結局、恐ろしくて彩陽とはろくに話せないまま天詞家を出てしまった。

だ。家庭教師の男が妹とやべえ写真をやりとりしてる——なんて思われてたらどうするんだ。

「でも、女子のパンツにも慣れておかないと。お姉ちゃんのパンツを見たいのは仕方ないですが、まずは亜月ちゃんのパンツを見慣れてレベルアップです♡」

「そんな必要あるか！ いいからもう引き返せつて」

「バス停は近くだから、一人で帰れますよ。なんなら、バス停でタクシーを呼びます」

「バス会社へのイヤガラセか？」

「とんでもない、先輩へのイヤガラセですよ」

「認めたな！」

亜月が後ろをついてきてると、奇襲でもくらうんじゃないかと不安なんだよな。

「つか、おまえ連絡先くらい普通に交換しろみたいなこと言ってなかったか？」

「いざ実行されるとムカつくんですよ。先輩のLINEアカをあたしも閲覧できるようにしておかないと……」

「怖い怖い！ それかなりグレーだぞ！」

亜月の場合、本当にやりかねないから恐ろしい。

「まったく……なにか話があるなら、さっさとさえ」

「じゃあ訊^ききますけど、今日の家庭教師、どうでしたか？」
 「なんだ、そんなことが訊^ききたかったのか？ 思ったより馬鹿^{ばか}だったが、手のつけようがないってレベルでもない。一応、貴秀院に合格したんだしな」

貴秀院の入試は三ヶ月ほど前だ。まだ、最低限の学力は維持^{維持}されているはず。

「首席合格のお姉ちゃんとは比べものになりませんけどね」

「彩陽と比べるのが間違^{まちが}いだろう。それにしても、家庭教師に来てよかった」

「今日はお姉ちゃん^きの着替^きえは見えてないでしょ？」

「それが目的じゃない！ そうじゃなくて、俺たちの横で彩陽が勉強してただろう」

「あの人は時間を無駄にしません。あれで、死に物狂いで努力してるんですよ」

「……今日、こっそり彩陽のノートを見てみたが……ひどいもんだった。ぐつちやぐちやでどう見ればいいのかわからないくらいだったな」

「おんや？ 姉のノートはDTPソフトでレイアウトしてんのかってほど綺麗^{きれい}に整理整頓^{せいとん}されてるはずですけど」

「俺が教室でこっそり見たときも、そんな感じだったな」

「先輩^{せんぱい}はウチの姉のノートを盗^{ぬす}み見るのが趣味^{しゅみ}なんですか？」

「金のかからない趣味^{しゅみ}だろう。丁寧^{ていねい}さんてかなぐり捨てて、俺に勝つために全力を出し

てきてるってことだよな」

「雑に見えても、姉の頭の中では整理できてるんでしょね。言っただしよう、奴^{やつ}は無駄なことはしませんよ」

「ヤバいな。俺、余計に彩陽に火をつけたかもしれない」

思わず笑ってしまいが、笑い事でもないか？

「勉強のほうのレベル上げなら望むところだ。何度でも彩陽に勝ってやる……」

「かしこさ^{かしこ}をもっと上げるのはいいんですけどね。よりによって勉強でお姉ちゃんに勝とうなんてよくもまあ、そんな無謀^{むぼう}なことを」

亜月はジトッと俺を半目で睨^{にら}んできて。

「姉はなにをやらせても優秀^{ゆうしゅう}ですが、頭の中身は特に桁外^{けいがい}れですよ。死んだら脳が保存されるレベル」

「アインシュタインじゃねえんだから」

脳の保存はともかく、彩陽の頭のデキが常人^{ぼな}離^{はな}れてるのは俺もよく知ってる。だが、だからこそ――

「無謀なのはわかってる。だからこそ、挑^{いど}む価値があったんだよ」

「……先輩、お姉ちゃんとなにがあったんです？」

「彩陽とは一年のときも同じクラスだったが、まともに話をしたのは一回きりだ。学園祭のときに、あいつに——」

「……んん？　なんでそこで止めるんです!?　続き、続きを早く！　ハリー！　ハリー！　学園祭でいついたいなにがあったんじゃー！」

「やめよう、別にたいした話でもねえよ。いいから、騒ぐな。近所迷惑だ」

高級住宅街の夜道は静かなもんだ。

さつきから俺たちの話し声が異様に大きく聞こえるくらいだ。

「ちえつ、ケチ。守銭奴。チンピラ。覗き魔。年下好き」

「止めないと言いつけるのか!?　つか、年下好きってなんだ！」

「先輩、騒ぐと近所迷惑ですよ」

「おまえほど殺意を抱かせるのに長けた女子高生はいないだろうな……」

証拠が残りにくい夜道で挑発するのはやめろ。俺の理性、そこまでアテにならない。

「つまり、学園祭でお姉ちゃんにフォーリンラブしちゃったってわけですか？」

「ずいぶんしつこく追及してくるな」

「ふーん、なにがあったか知りませんが、あのお姉ちゃんに勉強で勝つなんて無茶な目標掲げて、しかも達成しちゃうなんて。よっぽど好きなんですねえ」

「今日は、真面目な方向で絡んできやがるな……」

「理解できないなあ」

「なにがだ？」

「あたしなんて、お姉ちゃんのこと全然好きじゃないです」

「別に亜月に理解されなくても——ん？　おまえ、今なんて言った？」

今までだって、亜月が姉を好きだとか尊敬してるとか聞いたことはないが。

天詞姉妹が不仲なようには見えない。まったく見えない。

「ぶっちゃけ、お姉ちゃんと同じ貴秀院に進学する気なんてこれっぽっちもなかったですよ。むしろ、一番行きたくない学校でしたよ」

「……でもおまえ、無理をしてまで貴秀院に入っただろ？」

家庭教師で亜月の学力を見たからこそ、この後輩が相当な無理をして貴秀院に入ったと

確信できる。

「あ、バス来てますよ。先輩、今日はお疲れ様でした」

確かに、いつの間にかバス停について、今まさにバスがこっちに走ってきている。

だが、あんな話を聞かされてバスなんかどうでもいいというか——

「先輩」

「……………っ!？」

亜月は、俺の制服の袖そでをくいつと引くと。

ちゅっ、と頬ほおに軽く口づけてきた。

「おっ、おおいっ!？ 今度はなんなんだ!？」

「今のお話はナイショで。ちゅーは、口止め料です」

亜月はそう言うのと、くるっと身を翻ひるがえして走り去ってしまう。

「……なんなんだ」

口止めて誰だれにだよ。彩陽にか？

彩陽、と呼べるようになった感動がどこかに行ってしまったような。

亜月の奴は、いったい俺にどうしてほしいんだ……？

←←←←

きゅっと口紅くちびるを塗り、鏡の前でチェックする。

うん、大丈夫。どうもメイクは未だに苦手だけど、今日のデキはまあまあ。

「……そういえば、あんなこともあったっけ」

自分の唇くちびるをじっと見て、ふと思ひ出してしまった。

初めて男の人にキスしてしまった日のことを。あの夜道のことを。

「ほっぺにちゅーとか可愛いなあ、我ながら。子供か！ 子供だったけど」

今思い出しても、恥はずかしくなる。

家までのわずかな道のりで、あたしがどれだけ真っ赤になってたか、あの人は知らなかっただろうな。

ああ、初々うづうしい……。

実はあの頃のあたしは、ろくにメイクすらしていなかった。

髪かみの色は派手だったし、服装も余裕よゆうで校則違反いはんしまくっていたけど、化粧けしようは苦手ではとんどすっぴんだった。

「……よくまあ、すっぴんで人前に出られたもんだよ。若さって怖い」

あたしが暮らしている1Kの部屋。

部屋の真ん中に置いたローテーブルの上には、鏡とメイク道具、それにスマホ。

あたしはスマホを手にとって操作する。

クラウドストレージにアクセスして、フォルダの深い階層へ潜り——

普段は目につかないところに隠かくしてあるフォルダを開いた。

「あー、やっぱりメイクしてないなあ。でも肌はだ、つるつるだわ。我ながら憎にくたらしい」

クラウドの奥には、パーカーとミニスカートという格好だったあたしの写真。それに——あの人も。

あの頃のあたしがスマホで撮った写真は、たいていあの人と一緒だった。

「つか、先輩写りすぎ……ああ、先輩か。そういえば、先輩って呼んでたっけ」

いくつか前のスマホで撮った写真。

今のスマホには、ここ一年ほどの写真しか入れておらず、古いものはクラウドに退避させてある。

容量が不足してるわけじゃないけど、なんとなく古い写真がいつでも見られる状態というのは落ち着かない。

手元が狂って画面をスクロールさせたら、見たくもない写真が出てきてしまいそう。で、だったら消せばいいのと思うけど、それもできない。あたしは勇気がない。

「ホントに写真多いな！ どんだけ撮ってたの！」

思わずセルフツッコミ。

スワイプしてもスワイプしても、先輩との写真が出るわ出るわ。

「先輩がいる高校生活はたった二年だったのになあ。終わってみれば、一瞬だった——でしたよね？」

写真の中の先輩に話しかける。

いつものように仏頂面のままで答えてくれない。答えられたら怖いけど。

「おっと、もう行かないと」

つぶやいて、茶色の髪をふあさつと後ろに払う。

メイクはばっちり。ブラウスとスーツもきっちり着てるし、窮屈なタイトスカートとハイヒール、高すぎないブランド物のバッグで出かける覚悟もできてる。

もう、パーカーとミニスカート、厚底スニーカー、むやみに派手なリュックで自由に歩き回っていた頃とは違う。

そして、そのことを寂しいとも思えないほど、女子高生だった時代は遠くなった。ねえ、先輩。あんなに馬鹿だった先輩も、なんとか大人になりましたよ。

ああ、楽しみだなあ。

今のあたしを見て、あの仏頂面がどうなるのか。もうすぐですよ——理玖さん。

→→→→